

2016

大東市立歴史民俗資料館
館報 第1号

目次

発刊の辞 笠井敏光 2

I 館報

1、資料館 事業報告	5
(1) 展示・関連事業	6
(2) 講師派遣事業	14
(3) 野外活動センター共催事業	16
(4) 「学芸員体験講座」	17
(5) 博物館実習	18
(6) 小学校団体見学・小学校講師派遣事業	19
(7) 資料の貸出・受入	21
(8) 月別入館者数	22
2、市民学芸員 事業報告	23
(1) 例会	24
(2) 学芸員提案事業	25
(3) 市民学芸員提案事業 「野崎観音石造物調査」チーム	27
「祭りの音 祭りの声」チーム	28
「民俗資料の調査」チーム	29

II 研究報告

大東市龍間における水産業	武井二葉	32
展覧会「ちょっとむかしのくらし おうちの道具のうつりかわり」 の制作と実施	河島明子	43
市民学芸員提案事業「収蔵庫チーム」成果報告	甲斐規予子	50
空間の性格を活用した展示表現	森井綾乃	52
慈眼寺の歴史に関する2・3のメモ 一慈眼寺史研究事始め— [調査報告]	大畠博嗣	(4)
野崎観音の石造物調査中間報告	「野崎観音石造物調査」チーム	(1)

表紙・裏表紙デザイン 森井綾乃

編集 三谷祐太朗（大東市立歴史とスポーツふれあいセンター スタッフ）

発刊の辞

笠井 敏光

大東市立歴史民俗資料館（以下、資料館）は、昭和62年（1987）に市制30周年を記念して開館した。施設は、大東市立総合文化センターとして、文化ホール（サーティホール）・図書館・公民館との複合施設である。1階にスペースをもつ資料館は、常設展示室、収蔵庫、事務室および一般にも貸し出しされる展示室で構成され、年に1回程度の企画展が開催されてきた。

平成20年（2008）からは、施設すべてを指定管理者制度によって、民間に委ねることになった。

資料館の基本コンセプトは、「市民とつくる資料館」とする。これは、「博物館世代論」の第三世代（市民参加型）に位置付けることができる。本来は、「市民がつくる」とし、市民主体としたいところであるが、「市民と協働」する意味を考え、このようにした。

まず、展示の企画・調査・作業・展示・解説を「市民学芸員」と行うこととした。市民から公募した「市民学芸員」を養成し、プロパーの学芸員と協働する。一般的の「ボランティアガイド」とは区別し、市民がスタッフとして参画することを重視した。

次に、「地域の宝物（地域遺産）」を発掘し、その価値を学習し、その成果を展示で表し、来館者に解説を行う。「市民」とともに注目しているのが、「地域」である。地域にある宝物（遺産）を「世界遺産」に対して「地域遺産」と位置付け、その調査、学習を通して、市民が地域に学ぶ機会をつくり、その成果をアウトプットする「展示・解説」の場を設ける。

そして、日常的に、市内の歴史文化遺産の基礎データを蓄積し、計画的な調査研究を行うことによって、資料の価値を明らかにする。これは、資料館の展示を行うにあたっても、日常の調査研究が基本になることは間違いない。市内の寺院・神社・石造物・民間信仰・建造物・古文書・城郭・遺跡・民俗資料などに常に眼を光らせ、いつでも対応できるような体制を整える。

また、考古学・文献史学・民俗学・美術史学・博物館学等の学芸員を配置するとともに、外部の学識者とともに総合調査を行う。各分野の学芸員を揃え、基礎調査を日常的に行うとともに、市民からの質問や問い合わせなどにも対応できるようにしている。また、寺院などの総合調査には、外部の学識者とともに参加する。

さらに、文化遺産・図書館・学校・地域・団体等との連携を図る。資料館を軸に、これらの施設との連携を図り、ネットワークを構成する。また、周辺の地域・企業・寺社・商店・駅・大学等と協力して地域の振興を図り、まちづくりや観光の拠点となる。

平成20年度には、まず、はじめの一歩として、親しみやすい場をつくること、いつも市民のそばにある資料館を目的に、展示替えをはじめとするリニューアルオープンをおこなった。これまでの常設展示を撤去し、あらたにストーリー性をもたせた時代区分で展示を再構成した。あわせて、講演会や見学会、お話し会、体験教室などの事業を行う。

また、「市民学芸員講座」実施に向けて、まずは、「博物館学芸員」とは何かから始めてみる。学芸員に興味をもってもらうため、「学芸員のお仕事講座」を実施した。講座を通じて、学芸員の仕事や役割、資料の扱い方、文化財の概念、地域資料館の役割などを3回で学ぶ。

平成21年度には、「市民学芸員講座」を開催した。目的は、市民学芸員としての基礎知識を身につけることにある。月1回×12回、講義・実習で3時間。10回以上の出席で市民学芸員認定、修了証を発行した。講座の内容は、考古学・文献史・民俗学・見学会・巻物の扱い方・民具の実測・地域遺産などである。講座を修了した26名に修了証を授受した。

平成22年度には、市民学芸員活動が始まった。まず、「市民とつくる特別展＝神社探訪・絵馬

案内」に向けスタートした。館が行う展示を調査段階から関わる→調査から展示のプロセスがわかる→展示の趣旨や意図を理解→来館者への解説がスムーズ→歴史・文化を伝える手段として確立する。神社・絵馬を対象にした理由には、身近にあるが、あまり知られていないことから、神社を知る、奉納されたものを調べる、地域の方にお話をうかがう、モノ・人とふれあいながら地域遺産の価値を見出すこととした。具体的には、灯籠・狛犬・手水鉢などの年代、記銘内容、形などを記録する。また、絵馬の現状調査・絵馬の搬出・クリーニング・各絵馬を調査・解説文作成・展示をおこなう。各自、好きな絵馬を選び、その解説文を作成し、展示キャプション・図録にも掲載する。さらに、「市民学芸員レポート」を創刊し、市民学芸員を知ってもらいたい・もっと解説したい・苦労話を聞いてほしい・活動秘話など市民学芸員の思いを伝える。

平成23年度には、さらに一步進めて、企画展「大東の風景」の中で「私のモノ語り」に出品・展示了。市民学芸員が、各自思い出深いモノを展示し、それぞれの思いを語る。

大東市制55周年にあわせ、年表風に展示し、中学生が撮影した「大東百景」映像も放映、マンガ・おもちゃ・お菓子も展示了。市民による写真・絵画の「のこしたい大東の風景」を公募し、多くの作品が寄せられた。ウォーキングラリーでは、市民学芸員が案内する。

また、同年度には、資料館移転リニューアルに合わせスキルアップも図った。半年間の閉館期間に、市民活動が活発な他施設を訪問し、活動の参考にした。

さらに、3つのグループに分かれて学習会を開催するとともに、リニューアルに向けて、打ち合わせもおこなった。3つのグループは、①常設展・ハンズオン解説グループ、②特別展「堂山古墳群のひみつ」解説グループ、③堂山古墳群史跡広場現地案内グループである。

平成24年度には、資料館をリニューアルオープンした。常設展示は、「大東市と水とのかかわり」、特別展示は、「堂山古墳群のひみつ」、そして近隣の施設である「堂山古墳群史跡広場」もオープンした。また、企画から展示、普及まで市民学芸員が手がける「市民学芸員展：こんな大東みつけた」を開催した。展示内容は、民具紹介・市民学芸員の歩み・堂山の古墳解説映像・ジオラマで見る昭和30年代の住道駅前・古堤街道をあるいてである。あわせて、「市民学芸員連絡会」も発足した。

平成25年度には、市民学芸員とともに、市内のだんじり調査をおこない、その成果をもとに企画展「大東のだんじり」を開催した。地域への聞き取り調査、映像作成、展示などに市民学芸員が参画した。また、「第2回市民学芸員展」を開催し、市内の石造物や民話、社寺、樹木を取り上げて展示了。このほか、新しい市民学芸員の養成のための講座も開催した。

平成26年度には、春季展「野崎観音—いまむかしー」、企画展「カガケでひもとく民具の世界—技術の中の科学ー」、「だんじりの彫物展」、特別展「野崎専応寺—大東真宗の歴史と文化ー」などとともに、文化庁地域と共に働いた美術館・歴史博物館創造活動支援事業「だんじりを活かした地域共働事業」が始まった。

平成27年度には、春季展「野崎観音—境内の移り変わりー」、なつやすみ展「昼からナイトミュージアム」、文化庁補助事業「だんじりの記録、だんじりの記憶」、企画展「ちょっとむかしのくらしきくえさんちのいちにちー」、などとともに、市民学芸員活動が活発になり、事業も多岐にわたるようになってきた。

以上、これまでの展示・事業などを振り返ったが、外部への発信ができていないことに気が付いた。そこで、平成28年度からは、館報を作成し、その活動を報告することにした。内容は、展示・関連事業、講師派遣事業、学芸員体験講座、博物館実習、団体見学、出張授業、共催事業、市民学芸員活動、および研究報告である。

本冊をご覧いただき、活動についてご理解いただくとともに、ご意見を頂ければ幸いである。

I . 館報

(1) 資料館 事業報告

(1)展示・関連事業

春季展「慈眼寺の歴史と野崎まいり」

■日時：平成28年3月26日（土）～5月29日（日）
10時00分～20時00分

■担当：大畠博嗣

■参加者数：1537名（期間中入館者数）

■内容：毎年「野崎まいり」の期間に合わせて慈眼寺所蔵史料を借用し
絵図や古文書を使って寺と野崎まいりの歴史を紹介する展示



春季展講演会「江口の君と野崎まいり」

■日時：平成28年4月16日（土）14時00分～16時00分

■場所：歴史とスポーツふれあいセンター4F 多目的室1

■講師：大阪経済大学人間科学部教授 長田寛康さん

■参加者数：31名

■内容：野崎観音（慈眼寺）を篤く信仰した江口の君について文献史料やこれまでの研究
をふまえつつ紹介を行い慈眼寺蔵「江口の君像」について寂光寺蔵「江口の君像」
と比較しながら、製作時期を検討した。



企画展「古くて新しいおしごと図鑑」

■日時：平成28年6月18日（土）～8月28日（日）
10時00分～20時00分

■担当：武井二葉、大畠博嗣、溝辺悠介、森井綾乃、
中嶋いぶき、甲斐規予子、三榎友梨香

■参加者数：1485名（期間中入館者数）

■内容：私たちが生活を営むためにしてきた仕事や生計を立てるための仕事について
古今東西問わず紹介。いろんな「おしごと」を見て、自分だけの「おしごと
図鑑」を作製した。



出張展示「とびだせ！れきみん「古くて新しいお仕事図鑑」」

■日時：平成28年7月14日（木）～20日（水）9時00分～20時00分

■場所：大東市立総合文化センター 市民ギャラリー

■参加者数：70名

■内容：歴史民俗資料館で行われている企画展の一部を、大東市立総合文化センターに
出張展示した。



企画展関連事業「こども学芸員体験」

- 日時：平成28年7月31日（日）14時00分～16時00分
- 場所：歴史とスポーツふれあいセンター2F 常設展示室3F
企画展示室・一般・特別収蔵庫 4F 多目的室1・民俗収蔵庫
- 参加者数：10名
- 内容：企画展の子ども向け関連事業として、展示解説・収蔵庫見学、100円ショップで販売する便利グッズを使った調査体験などを行った。



企画展関連事業「バリアフリー探検隊」

- 日時：平成28年8月12日（金）10時00分～14時50分
- 場所：歴史とスポーツふれあいセンター 4F 多目的室（1）（2）
野崎参道商店街・野崎駅周辺
- 講師：川村義肢株式会社 剣持悟さん他
- 参加者数：16名
- 内容：企画展の関連事業として、すみやすい町をつくるためのお仕事について学ぶ場を設けた。
講師を招き、建物の中や町中にあるバリアフリーについて学び、実際に白杖や車いすを使って町中で使用する体験を行った。



歴史民俗資料館市民学芸員提案事業

「祭りの音 祭りの声」

■日時：平成28年9月18日（日）～平成28年10月30日（日）
10時00分～20時00分

■担当：だんじりを活かした地域共働事業実行委員会
(市民学芸員「祭りの音 祭りの声」チーム)

■参加者数：801人（期間内入館者）

■内容：大東市内のだんじりについて、曳行時における地域による太鼓・鉦のたたき方や掛け声の違いに注目し、市民学芸員が地域の方から聞き取り調査を実施し、その成果を展示した。



だんじりを活かした地域共働事業シンポジウム

「だんじりからはじまり、だんじりでひろがる」

■日時：平成28年10月23日（日）13時00分～17時00分

■場所：歴史とスポーツふれあいセンター 4F 多目的室1

■参加者数：25人

■内容：第一部ではこれまでってきた事業の担当者が報告を行い、第二部では三年間の事業を振り返りながら、今後の課題などについてパネルディスカッションを行った。



市制施行60周年記念特別展 「よみがえる平野屋新田会所」

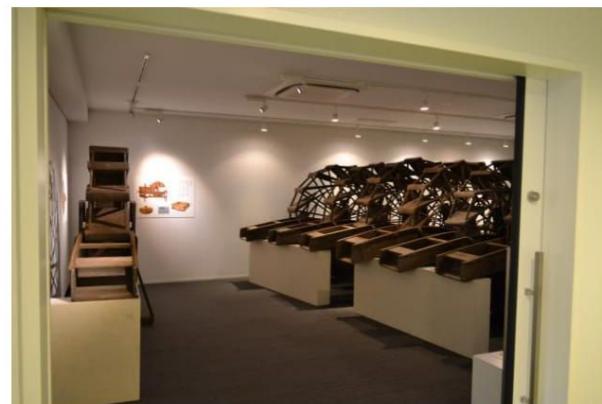
■日時：平成28年11月12日（土）～平成29年1月15日（日）
10時00分～20時00分

■担当：大畠博嗣（大東市教育委員会と共に）

■参加者数：915人（期間内入館者）

■内容：今年大東市市制60年を迎えたことを記念し、現代の大東市の

基礎を作った江戸時代における深野池の新田開発と、新田を管理した平野屋新田会所について、建築・考古・文献・民具・宗教の視点から読み解き、展示を行った。



特別展講演会「担当者による会所講座」

（考古・宗教）

■日時：平成28年11月19日（土）13時00分～15時00分

■場所：歴史とスポーツふれあいセンター4F 多目的室（1）

■講師：教育委員会生涯学習課参事 黒田淳さん、大畠博嗣

■参加者数：8名

（文献・民俗）

■日時：平成28年12月4日（日）13時00分～15時00分

■場所：歴史とスポーツふれあいセンター4F 多目的室（1）

■講師：市史編纂委員 岡村喜史さん、奈良県立民俗博物館学芸員 溝辺悠介さん

■参加者数：20名

■内容：特別展の各分野担当者による講演会。



特別展シンポジウム「よみがえる平野屋新田会所」

- 日時：平成28年12月10日（月）13時00分～17時00分
- 場所：歴史とスポーツふれあいセンター 4F 多目的室（1）
- 参加者数：34人
- 内容：兵庫県立歴史博物館館長の藪田貴さんによる基調講演と、文化財保護審議会委員の吉田高子さんによる平野屋新田会所の建築について講演のあと、各展示担当者を交えて問題点や今後の課題などディスカッションを行った。



特別展見学会「大阪府内の新田会所を巡る」

第1回 平野屋新田会所跡

- 日時：平成28年11月12日（土）13時00分～16時00分
- 講師：教育委員会生涯学習課参事 黒田淳さん、大畠博嗣
- 参加者数：17名



第2回 安中新田会所跡 旧植田家住宅

- 日時：平成28年11月27日（日）13時00分～16時00分
- 講師：安中新田会所跡 旧植田家住宅学芸員 安藤亮さん
- 参加者数：10名



第3回 加賀屋新田会所

- 日時：平成28年12月11日（日）12時30分～16時00分
- 講師：住之江のまち案内ボランティア
- 参加者数：16名



第4回 鴻池新田会所

- 日時：平成29年1月14日（土）13時00分～16時00分
- 講師：鴻池新田会所 松田順一郎さん
- 参加者数：27名



「ちょっとむかしの暮らし おうちの道具のうつりかわり」

■日時：平成29年1月21日（土）～3月5日（日）
10時00分～20時00分

■担当：河島明子
市民学芸員「博物館・学校のよりよい関係つくり隊」チーム

■参加者数：1605名（期間内入館者）

■内容：家のなかで使う道具のうつりかわりを紹介。

火鉢や蚊帳など、季節に合わせて使う道具や、現代でも使われるアイロンや電話の変遷を紹介した。



「こどもれきみんカーニバル」

■日時：平成29年3月5日（日）
10時00分～12時00分
13時00分～15時00分

■場所：四条体育館、四条クランド

■参加者数：186名

■内容：市民学芸員によるたこづくりや紙芝居などのワークショップのほかに、近隣の博物館・資料館に出張してもらいワークショップを行った



春季展

「観音さんへの散歩道—野崎まいりをめぐる物語—」

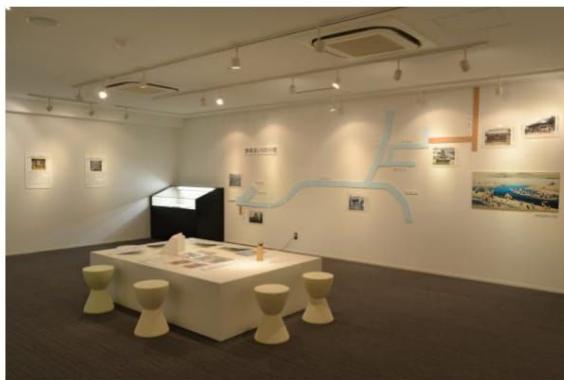
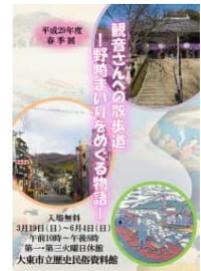
■日時：平成29年3月19日（日）～6月4日（日）

10時00分～20時00分

■担当：三榎友梨香、大畠博嗣

■参加者数：253名（3月19日～31日の入館者数）

■内容：野崎観音に向かう道中で、野崎観音とともに過ごしてきた地元の人々が語る物語、落語・文楽といった全国に広まった物語など野崎観音にまつわる物語を紹介。



春季展関連事業

「野崎まいりをめぐる物語—落語と現地案内—」

■日時：平成29年3月20日（月・祝）

13時00分～16時00分

■場所：歴史とスポーツふれあいセンター4F

多目的室1、慈眼寺

■講師：落語家 桂出丸さん

歴史とスポーツふれあいセンター名誉館長 笠井敏光さん

■参加者数：33名

■内容：落語「野崎詣り」を解説つきで楽しんだ後、学芸員の案内で野崎観音へ見学を行った。



(2)講師派遣事業

講師派遣事業「大東市の歴史を知る・野崎観音と水運」

- 日時：平成28年4月2日（土）14時00分～15時00分
- 場所：八尾市立しおんじやま古墳学習館
- 講師：武井二葉
- 参加者数：26名
- 内容：「野崎観音と水運」をテーマとして、大東市の歴史や文化について説明し、史跡や文化財解説を交えた「野崎観音ツアー」を行った。

講師派遣事業「近畿民具学会総会報告」

- 日時：平成28年4月24日（日）13時00分～18時00分
- 場所：Gallery A.I（豊中市）
- 講師：武井二葉、溝辺悠介、森井綾乃、市民学芸員 檜垣一美、竹元智子
- 参加者数：19名
- 内容：平成27年度企画展「ちょっとむかしのくらし～きくえさんちのいちにち～」にだれがどのようにかかわったのかをリレー講演の形で紹介しながら、従来の「むかしのくらし」の展覧会との違いを明らかにした。

講師派遣事業「飯盛山ハイク」

- 日時：平成28年5月3日（火／祝）9時00分～13時00分
- 場所：飯盛城址
- 講師：溝辺悠介
- 参加者数：21名
- 内容：飯盛城址のガイド。堀切や堅堀など中世山城の防御設備について、現地を歩きながら解説。大東市青少年協会のリーダー研修として実施。

講師派遣事業 大阪産業大学工学部教養科目

「大阪産業大学と社会」講義

- 日時：平成28年5月24日（火）10時40分～12時10分
- 場所：大阪産業大学 701号室
- 講師：溝辺悠介
- 参加者数：144名
- 内容：大阪産業大学一回生（工学部）教養科目「大阪産業大学と社会」のゲスト講師として大東市の名所・旧跡を紹介する授業をおこなった。



講師派遣事業 だいとうシニア観光大学講義

- 日時：平成28年10月13日（木）10時00分～12時00分
- 場所：大東市立歴史とスポーツふれあいセンター4F 多目的室（1）
- 講師：武井二葉
- 参加者数：13名
- 内容：大東市の歴史について講義したのち、常設展示と「祭りの音・祭りの声」の解説、収蔵庫の見学を行った。

講師派遣事業 出前授業「れんこん作り」

- 日時：平成28年10月19日（水）10時00分～12時00分
- 場所：大阪府営 深北緑地
- 講師：武井二葉、河島明子
- 参加者数：105名
- 内容：むかしのれんこん作りの様子について民具や写真を使って解説した。



(3)野外活動センター共催事業「おとな部 米作り」

■内容：青少年協会との共催事業。資料館が収蔵する民具を利用し、米作りを行った。

■日時：

- 第1回 苗代 5月1日（日）10時00分～13時00分
- 第2回 代かき 5月28日（土）10時00分～15時00分
- 第3回 田植え 6月5日（日）10時00分～15時00分
- 第4回 稲刈り 10月10日（月）10時30分～15時00分
- 第5回 脱穀 11月3日（木）10時30分～15時00分
- 第6回 試食 11月26日（土）10時30分～15時00分
- 第7回 しめ縄作り 12月25日（日）10時30分～15時00分
- 第8回 わら細工 1月22日（日）10時30分～15時00分
- 第9回 わら細工 2月26日（日）10時30分～15時00分
- 第10回 わら細工 3月26日（日）10時30分～15時00分

■場所：青少年野外活動センター

■参加者数：延べ84名（1～6回まで）



(4)学芸員体験講座

■日時：14時00分～16時30分

第1回 ガイダンス 4月23日（土）

第2回 大東の歴史 5月28日（土）

第3回 民具の見方・扱い方 6月25日（土）

第4回 企画展解説 7月30日（土）

第5回 美術資料の見方・扱い方 8月27日（土）

第6回 文献史料の見方・扱い方 9月24日（土）

第7回 考古資料の見方・扱い方 10月22日（土）

第8回 近隣博物館見学 11月26日（土）於：門真市立歴史資料館

第9回 特別展レクチャー 12月24日（土）

第10回 レファレンス（資料調査の方法） 1月28日（土）

第11回 市内文化財見学 2月25日（土）於：専応寺太子堂、宝塔神社、
堂山古墳群史跡広場

第12回 まとめ 3月25日（土）

■場所：歴史とスポーツふれあいセンター4階 多目的室1 他

■参加者数：延べ 252名

■内容：博物館の専門職員、学芸員の仕事を体験する講座。

講座終了後は、「市民学芸員」として活動できる。



(5)博物館実習

大阪国際大学 博物館実習事前実習

■日時：7月9日（土）10時30分～16時30分

■担当：武井二葉、大畠博嗣、溝辺悠介

■参加者数：12名

■内容：大阪国際大学からの依頼を受けて実施。

学外実習の事前学習として、資料の取り扱い方を中心に実習。館蔵の文献資料、民俗資料、美術資料を活用して実施した。

阪南大学「博物館資料論」学外講義

■日時：7月16日（土）14時00分～17時00分

■担当：武井二葉、大畠博嗣

■参加者数：12名

■内容：阪南大学からの依頼を受け実施。

博物館資料論を実地で学べるよう、館蔵の「文献資料」「美術資料」を活用し、講義と実習を行った。

博物館実習

■日程：8月10日（水）～14日（日）

■担当：武井二葉、大畠博嗣

■受入人数：大阪国際大学3名、大谷大学1名、龍谷大学2名 計6名

■内容：博物館のあらゆる機能および業務内容について、実際に運用されている館で学芸員の指導のもとに実習を行った。



(6)小学校団体見学・小学校講師派遣事業

小学校団体見学

三箇小学校（3年生）

■日時：平成28年11月18日（金）

■来館者数：69名



南郷小学校（3年生）

■日時：平成29年1月27日（金）

■来館者数：107名

泉小学校（3年生）

■日時：平成29年1月27日（金）

■来館者数：80名



四條畷学園小学校（3年生）

■日時：平成29年2月6日（月）

■来館者数：100名

諸福小学校（3年生）

■日時：平成29年2月8日（水）

■来館者数：156名



四条北小学校（3年生）

■日時：平成29年2月10日（金）

■来館者数：88名

北条小学校（3年生）

■日時：平成29年2月16日（木）

■来館者数：79名



住道北小学校（3年生）

■日時：平成29年3月2日（木）

■来館者数：63名

※来館者数は、児童数と引率教職員を含む。

※三箇小については、「ちょっとむかしのくらし」展開催前のため、
むかしの写真レクチャー・収蔵庫見学・洗濯体験を行った。

小学校講師派遣

洗濯体験

四条小学校（6年生）

■日時：平成28年6月3日（金）

■講師：武井二葉

■参加者数：84名



諸福小学校（3年生）

■日時：平成29年2月22日（水）

■講師：武井二葉、河島明子

■参加者数：157名



蓮根作り

氷野小学校（3年生）

■日時：平成28年10月26日（水）

■講師：武井二葉、河島明子

■参加者数：105名

糸車体験（1年生）

北条小学校

■日時：平成28年12月5日（月）

■講師：武井二葉、河島明子

■参加者数：47名

四條畷学園小学校

■日時：平成29年1月23日（月）

■講師：武井二葉、河島明子

■参加者数：109名

三箇小学校

■日時：平成29年1月30日（月）

■講師：大畠博嗣、河島明子

■参加者数：69名

氷野小学校

■日時：平成29年2月2日（木）

■講師：河島明子、甲斐規予子

■参加者数：95名

四条小学校

■日時：平成29年2月9日（木）

■講師：武井二葉、河島明子

■参加者数：83名

南郷小学校

■日時：平成29年2月10日（金）

17日（金）

■講師：武井二葉、河島明子

■参加者数：77名（2日合計）

寝屋川市立桜小学校

■日時：平成29年2月14日（火）

■講師：河島明子、甲斐規予子

■参加者数：58名



(7)資料の貸出・受入

(1) 資料の貸出

資料名	貸出先	目的	公開期間
中垣内遺跡出土ナイフ形石器2点 宮谷古墳群出土有舌尖頭器1点 中垣内遺跡出土縄文土器1式	四條畷市教育委員会 地域教育課	四條畷市立民俗資料館第31回特別展「ヒスイのきらめき—北河内からみた交流と縄文のまつりー」における展示	8/15～2017/1/13 (展示期間：10/4～12/18)
土師器35点 須恵器1点 金属片1点 石材1点	生駒ふるさとミュージアム	平成28年度冬季特別展「戦国の生駒—北大和、河内、南山城をめぐる攻防と展開—」に伴う展示のため	2/2～3/14 (展示期間：2/11～3/12)

(2) 資料の撮影・掲載

資料名	貸出先	目的	公開期間
中垣内遺跡出土ナイフ形石器 中垣内遺跡出土縄文土器 宮谷古墳群出土有舌尖頭器	四條畷市教育委員会 地域教育課	四條畷市立民俗資料館第31回特別展「ヒスイのきらめき—北河内からみた交流と縄文のまつりー」のための事前調査	7/19
中垣内遺跡 縄文土器出土状況写真	四條畷市教育委員会 地域教育課	四條畷市立民俗資料館第31回特別展「ヒスイのきらめき—北河内からみた交流と縄文のまつりー」における展示	10/4～12/18
飯盛城模型	株式会社 碧水社	『週刊ビジュアル戦国王』18号「安見宗房」の記事に掲載	9/3～9/30
飯盛城模型	株式会社 碧水社	『週刊ビジュアル戦国王』29号、三好長慶紹介記事にて図版として利用するため	11/25～12/18
河内名所図会(彩色)	杉本 力哉	J.COMの「かつみさくりのなかよしがいっぽん」の紹介素材	11/16～11/30
飯盛山城跡本廓東側の石垣写真	生駒ふるさとミュージアム	平成28年度冬季特別展「戦国の生駒—北大和、河内、南山城をめぐる攻防と展開—」に伴う展示のため	2017/2/11～3/12

(8)月別入館者数

月	開館日数	一般来館者			団体			事業参加者	来館者数合計
		大人	子ども	計	大人	子ども	計		
4月	28	349	136	485	67	0	67	179	731
5月	29	409	176	585	208	99	307	309	1,201
6月	28	184	147	331	0	0	0	245	576
7月	29	278	341	619	96	0	96	168	883
8月	29	278	278	556	0	0	0	129	685
9月	28	253	169	422	0	0	0	111	533
10月	29	359	98	457	141	0	141	240	838
11月	28	272	62	334	45	65	110	184	628
12月	26	230	82	312	21	0	21	236	569
1月	27	297	140	437	78	178	256	318	1,011
2月	26	322	196	518	41	407	448	546	1,512
3月	29	324	112	436	4	59	63	307	806
合計		336	3,555	1,937	5,492	701	808	1,509	9,973

I . 館報

(2).市民学芸員 事業報告

(1)例会

市民学芸員連絡会会議

■日時：各月第1土曜日、13時00分～14時00分

第1回	4月9日	第7回	10月1日
第2回	5月7日	第8回	11月5日
第3回	6月4日	第9回	12月3日
第4回	7月2日	第10回	1月7日
第5回	8月6日	第11回	2月4日
第6回	9月3日	第12回	3月4日

■参加者：武井二葉、大畠博嗣、河島明子、甲斐規予子

　市民学芸員提案事業代表者4名

■内容：市民学芸員例会にともなって、事前に報告事項や、計画について打ち合わせを行った。

市民学芸員例会

■日時：各月第1土曜日、14時00分～16時00分

第1回	4月9日	第7回	10月1日
第2回	5月7日	第8回	11月5日
第3回	6月4日	第9回	12月3日
第4回	7月2日	第10回	1月7日
第5回	8月6日	第11回	2月4日
第6回	9月3日	第12回	3月4日

■登録者数：42名（1期12名、2期4名、3期11名、4期15名）

■内容：市民学芸員連絡会と当館学芸員からの事務連絡と、市民学芸員提案事業について各事業の進捗状況の報告を行ったあと、それぞれが参加する事業に分かれて活動を行った。



(2)学芸員提案事業

学芸員体験講座サポート隊

- 日時：学芸員体験講座開催日
- 登録者数：7名
- 内容：学芸員体験講座の受講生と市民学芸員とのつながりを深めるために、
学芸員体験講座のサポートを市民学芸員が行う。

博物館・学校のよりよい関係つくり隊

- 日時：各月土曜日、10時00分～12時00分
- 4月16日 8月20日 12月17日
- 5月21日 9月17日 1月21日
- 6月18日 10月15日 2月18日
- 7月16日 11月19日 3月18日
- 登録者数：18名
- 内容：毎年1月に行なわれる小学生向けの展示に向け、
他館の見学を行いながら学芸員とともに準備を進め、展示を行った。

襖の中から古文書はがし隊

- 日時：各月水曜日、14時00分～16時00分
- 4月13日 8月10日 12月14日
- 5月11日 9月21日 1月11日
- 6月 8日 10月12日 2月 8日
- 7月13日 11月 9日 3月 8日
- 登録者数：23名
- 内容：平野屋新田会所より移動させた襖の中より古文書を剥がす作業と、資料館が借用・所蔵する古文書の調査・整理作業を学芸員の指導を受けながら行った。
また、参加者にくずし字の講習会も行った。

お米作り隊

■日時：野外活動センター共催事業「おとな部　米作り」開催日

■登録者数：19名

■内容：野外活動センターとの共催事業のサポートを行った。

だんじり復元隊

■日時：

5月29日（日）10時00分～12時00分
6月19日（日）14時00分～16時00分
7月 6日（水）10時00分～15時00分
7月29日（金）13時00分～17時00分
8月 5日（金）14時00分～17時00分
9月26日（月）13時00分～16時00分
10月 7日（金）10時00分～15時00分
11月16日（水）14時00分～16時00分
12月18日（日）10時00分～17時00分
1月10日（火）10時00分～15時00分

■登録者数：12名

■内容：平成28年文化庁補助金事業である、「だんじりを活かした地域共働事業」の市民学芸員活動チーム。だんじりの彫物のクリーニングや3D計測・出力の講義を通じ、だんじりのジオラマを作成した。



(3)市民学芸員提案事業

野崎観音石造物調査チーム

- 日時：市民学芸員例会開催日
- 登録者：安達昌代・上野繁・岡崎玲子・黒川喜和子・加茂伸子・北野武司・田里孝子・中下志津子・中村義之・林田恵子・堀仁美・松井健一・森井綾乃・水永八十生
- 内容：野崎観音の境内にある石造物について、所在場所や刻まれた文字を解読し、それにまつわる背景を調べた。



民俗資料の調査チーム

■日時：市民学芸員例会開催日、各月月曜日 13時00分～16時00分

4月25日	9月12日
5月16日	11月21日
6月20日	1月25日
7月25日	2月20日
8月29日	

■場所：歴史とスポーツふれあいセンター4F 多目的室（2）他

■登録者：石田薰、氏原稔夫、榎 幸、為則泰明、為則照子、西本明子、檜垣一美、棄原妙子、竹元智子、柴田俊雄

今回出てきたのは、男物の和服である。

写真撮影は、袖に棒を通して脚立に渡して行った。文化財の写真撮影について教えてもらったとき、衣類の撮影は柔らかい光を45°の角度で当たるようにするとよいと言われたので、できるだけそのようにした。

調査票作成では、素材が分からないのに困った。和服に親しんでいない我らには、絹も木綿も麻も触っただけでは分からない。ほつれた糸を喫煙所へ持って行って燃やし、ようやく絹と木綿を分ける。単衣でシャリ感があれば、麻か。

縞模様一つをとっても、使われている色の名称がなかなか特定できない。着物の部分の名称も分からない。袴も何着かあったが、ズボン型ではなくスカート型だ。紋付きには、当然家紋が入っている。

図書館で着物や和の伝統色、家紋事典などを借りてくる。『体型別男の着物の着付け入門』という本が役に立った。季節別の素材や部分の名称、袴の着付けなども知ることができた。ちなみにスカート型の袴は、行灯袴というそうだ。

色については、分類が細かすぎてほとんど分からなかった。青にも緑にも茶色にも濃淡色々、赤がかっていたり、黄色みを帶びていたり。

最後に、たたむのにも大騒ぎ。メンバーの中でたたみ方が分かっている人は一人か二人しかいない。袴に至っては、折り目がたくさんある。次に出した時、とんでもない折り目がついているのではなかろうか。



祭りの音 祭りの声チーム

■日時：市民学芸員例会開催日

7月16日（土）10時00分～12時00分

8月27日（土）9時30分～12時00分

■登録者：柿木薫、小泊繁美、中西昭治、広田美和、前田喜久子、松下茂子、森本長茂

■内容：平成28年度文化庁補助金事業として市民学芸員の提案で行う市民学芸員事業の一つ。秋祭りの囃子やかけ声を調査した。



II .【研究報告】

大東市龍間における氷産業

武井二葉

1. はじめに

大東市龍間は、大東市の東部に位置し、生駒市に隣接する標高 200～350m の山間部の集落である。大阪・奈良をつなぐ峠道が横断し、山裾には深野池が広がるという立地から、古くから人や物の往来があったことが知られる。例えば、元和 6 年（1620）の徳川大坂城再築の際には、この地から花崗岩が搬出されたことが刻印石、矢穴石などの存在から明らかである¹⁾。

近代になると、石材や天然氷といった物や、宝山寺への参詣道として人が行き交った。大東市龍間ににおいて、石材業、天然氷、宝山寺への参詣はそれぞれ別の要因で廃れていくが、それぞれの時期や規模などが明らかになれば、龍間の生業の全容を知る手がかりになる。三宅らの調査により石材業については明らかにされたが²⁾、天然氷については未だ研究が進んでいない。また、日本の氷業史を見ても、古代における氷室の研究や明治期の函館氷の研究は多くみられるが、資料の乏しさからか近代における地方の氷業についてまとめたものは少ない。

『大東市史（近現代編）』では、執筆者である山口が四條畷の古老や龍間の高木政治氏から聞いた話、高木氏が所有する文書から龍間の天然氷を次のように説明する。

氷製造業者は龍間近傍民の人夫数人を雇って氷を製造、その天然氷を厚さ七寸・二尺角程（二十貫）に切断し、人夫を使って氷貯蔵所へ収納する。これを「二十貫・一円二十五銭」で売渡す。卸売業者はこの氷を夏期に人夫を使って角ノ堂浜へ出して舟運で大阪へ、或は牛車を利用して直接大阪へ運びだして小売りする。時には大阪にも氷貯蔵庫を作っていたことも考えられる。（『大東市史 近現代編』457—460 頁）

『市史』には、高木家所有文書として明治 31 年の「天然凍氷売渡し証書之事」の翻刻文と明治 21 年の大坂府による水質の「試験成績告示書」を掲載する他、本文中から他の文書の存在が読みとれるが、仔細を知ることはできない。また生駒市の氷業に関して高田は、前田直治郎氏の談として、氷の製造方法などを報告する³⁾。他、食物史研究で知られる篠田統による「寝屋川の舟運」においては、氷舟など天然氷の輸送手段を中心に記述する。そのなかで、「日清戦争から北清事変にかけて、函館五稜郭の氷（中略）が船で送られ、竜間の氷は次第に重要性を失」ったとしているが⁴⁾、後述するように龍間の氷が重要性を失った理由は別にある。

いずれも当時を知る人物からの聞き取りが中心となり、氷池や製氷方法、輸送手段について具体的に知ることができるが、氷業としてどのような変遷を経たのかまではわからない。

近年筆者が調査・研究を行うなかで、龍間住の故・樋口清春氏から預かった文書（以下、「龍間氷関係文書」）のなかに龍間の氷業について明らかにする資料を確認できた。そこで、まずこれまでの古代の氷室や近世・近代における氷業史の研究によって、どこまで明らかにされているかを確認する。次に、龍間氷関係文書が龍間地域の歴史・民俗や氷業史を明らかにする上でどのような意味を持つのか、資料を紹介しつつ報告する。このことにより、氷業から龍間の地域史を明らかにするのみならず、関西における氷業の発展と衰退を知ることが可能になるものと考える。

2. 古代における氷室「更浦氷所」

養老年間（717—724）、「更浦氷所」（現大東市・四条畷市域に推定）があったことが、平城宮跡から発掘された木簡からわかっている。その後も、河内国讚良郡讚良の氷室として、『延喜式』（927 年成立）

や『朝野群載』(平安時代後期)などにその記録がみられる⁵⁾。この氷室の所在地を求める研究には、「氷室考」(大西, 1961, 9-11 頁)、「主水司所管の氷室について」(福尾, 1963, 21-22 頁)があるが、具体的な位置については『五畿内志』「河内志」(1735 年刊行)の「氷室址 在瀧道上方、今稱室池、屬甲可南」という記述により、現在の四條畷市室池を推定しているにとどまる⁶⁾。古代における氷室は宮廷へ供御の氷を保管するものであつただけに、律令制の衰退を経て、再び『河内志』に姿を現すまで存続したとは考えにくい。中世から近世にかけて廃絶し、江戸時代中期には「室池」という地名として残っていたため、「河内志」では氷室「址」としたのではないかと考える。

3. 日本氷業史

(1) 日本氷業史の幕あけ

安政 5 年 (1858)、日米修好通商条約が結ばれ横浜港が開港すると、外国人の飲料・食料の保存用や治療用に、ボストンの氷が輸入されるようになった。しかし、輸送コストがかかり高額なものであったため、国内での採氷に目が向けられるようになる。

中川嘉兵衛は、元治元年 (1864) 以降氷の事業化に取り組み、明治 3 年、日本で初めて氷の事業化に成功した人物である。『函館市史 通説編 2』などを参照しながら、その経緯をみていく。中川は富士山麓に始まり、「甲斐ノ国カジカ沢或ハ秩父ノ山陰或ハ赤城山ノ下流或ハ日光或ハ釜石宮古或ハ青森秋田」など日本各地で採氷を試みる⁷⁾。しかし、いずれも横浜への輸送が困難であり、失敗に終わっている。明治 3 年によく函館・五稜郭の採氷に成功し、「昨夏横浜ノ氷会社ヨリ氷ヲ売出シ、其価甚ダ安ク、衆人ノ賞美大方ナラズ、此会社ノ発起人ハ、中川嘉兵衛（後略）」(『新聞雑誌』第 44 号, 明治 5 年) と報道されるまでになった⁸⁾。明治 6 年になると、中川は開拓使へ北海道内の氷について専売願書を出し、明治 11 年まで中川とその「社中に加盟した者」への専売が認められるようになる⁹⁾。『明治十年内国勧業博覧会賞牌褒状授与人名録』には、「龍紋賞牌 伐氷器械并菓物貯藏品其外十種 中川嘉兵衛」の記載がみられ、これを契機として函館氷はその名を知られるようになる。中川の道内での専売期間が満了した明治 11 年以降、各地に製氷業者が続出し、内務省は同年「氷製造人並販売人取締規則」を公布するに至った。

(2) 龍紋氷室を中心とした関西における氷業史

明治 11 年以降、関西でも氷業に着手する者が現われる。その一人が、函館氷を「龍紋氷」の名で販売し、のちに「龍紋氷室」を経営する山田啓助である。山田は、氷の一杯売をしたことが契機となり¹⁰⁾、明治 13 年頃から関西方面における函館氷の販売を担うようになる。明治 15 年頃とされる龍紋氷室の宣伝文からは、「大阪南区四ツ橋南詰」「大阪北区中ノ嶋筑前橋」の他、東京、大津、神戸、京都などにも貯氷庫を構えていたことがわかる¹¹⁾。さらに、明治 26 年には、『東京盛大氷店一覧表』という番付において「龍紋氷室」は「日本元祖 中川」と肩を並べるまでに成長する¹²⁾。その後、明治 31 年には、「器械製氷工場 京都疎水慶流橋南」において人造氷を手がけるようになった¹³⁾。明治 36 年頃には、大阪だけで四ツ橋南詰東の支店、難波新地四番町、中之島六丁目、天満樽屋町の分店、東区農人橋西詰の氷室を構える¹⁴⁾。その後、昭和 3 年に、龍紋氷室は日東製氷に合併、大日本製氷と改称し、山田啓助は筆頭株主となる¹⁵⁾。

4. 龍間における氷業

(1) 文献資料にみる龍間氷業史

『京都氷業史』の記述にしたがえば、「明治 22 年頃から 27, 8 年時代に各地で氷池の経営者が続出した。関東では野州佐野付近、及び今市地方、関西では神戸の六甲、河内の龍間(下線、筆者)、越智」と

ある¹⁶⁾。ところが、明治 22 年 1 月 18 日付『毎日新聞』には「地氷の初切、当地にて地氷と称るに、摂津河内大和の三国にて結凍する氷塊を云うものにて、此地氷の初切は例年（下線、筆者）冬中を以てせし処、昨冬の寒気は時後れの為め、各地共切出しを為すに至らず、漸やく本月五日の気候にて始めて結氷しかかり、茲両三日より当地へ切出しを始めたるゆえ、貯蔵家には昨今続々貯蔵をはじめ居る由なるが、最初右の如き時候にてありしを以て製氷家は何れも本年は危み居りしも、昨今の気候は此のうへなき模様ゆえ、何れも眉を展ばし居ることなり、但し、地上の厚さは二寸二分位なりと云う。」とあることから、明治 21 年にはすでに地氷を扱う製氷家があったことがわかる¹⁷⁾。

明治 23 年、龍紋氷室は大阪凍氷株式会社を買収し、河内生駒山における製氷権を一手に掌握することとなる¹⁸⁾。明治 40 年には、大阪中之島へ日産 50 噸の工場を竣工し、以降、天然氷から機械氷の時代へ変わっていく¹⁹⁾。

（2）龍間氷関係文書と天然氷の衰退

当該文書は、龍間の在住で当地の年中行事や天然氷について調査をしておられた故・樋口清春氏から預かったものである。故・樋口氏が調査の過程において、地域の方から当該文書を入手されたのだと聞いている。大東市立歴史民俗資料館で資料を預かり、調査をし、ご返却に伺おうとしていた矢先に、体調を崩されて入院となってしまった。そこで、故・樋口氏のご遺族の方にご了承いただき、地域の歴史を示す資料として、さらなる研究や展示その他の場面で活用を図るため、ここに公開することとした。

預かった資料は、文献史料が 17 点、木札が 6 点からなる。

木札には、人名、氷池の所在地、規模が記されており、朱字で「番号」が記入されている。

文献史料には、氷業に関する史料が 14 点、宝山寺参詣の石柱に関する史料など氷業に直接関係ないと思われる史料が 3 点ある。今回は氷業に関する史料 14 点を紹介していく。

史料①は、明治 21 年、「大阪凍氷会社」より龍間の氷生産者 A 氏に「凍氷製産地」の肝煎を任ずる文書で、本文書群の一番古い年紀を記す。前項において確認した通り、当時の河内生駒山の製氷権を大阪凍氷会社が掌握していたということが裏付けられる史料である。また前項で明治 22 年頃より氷池の経営者が登場することをみてきたが、史料①からも、明治 21 年には採氷が始まっていたことも確認ができる。また、この史料からは新たに、現地に世話役を置いたことが確認できる。

史料②③④は、明治 28 年、明治 30 年、明治 31 年の「凍氷製造場明細帳」である。番号、製造場所在、池敷段別、製造原水、製造人住所、製造人氏名を掲載する。前述した木札の番号と同史料の番号が一致したため、木札は鑑札の役割を果たしていたと考えられる。②③④の史料は A 氏と同姓の人物により書かれており、龍紋氷室による大阪凍氷会社買収後も、A 家が「肝煎」の役割を果たしたのではないかと推測できる。

史料⑤は、明治 33 年 9 月 25 日付「大阪府広報」である。「氷雪営業取締規則施行細則」を知らせるもので、氷の品質管理の徹底が図られていることがみてとれる。これによれば、所定の事項をもって、警察署に出願認可を受ける必要があり、その所定事項から察するに②③④の史料が出願書類の役割を果たした可能性がある。

史料⑥⑦は明治 33 年「凍氷伐採帳」、39 年「凍氷採取帳」のである。何れも 1 月下旬より採氷が行われたことを記録している。

史料⑧は「氷池石垣工事入費記」とあり、資料中には 36 年という年紀が確認できる。『生駒市文化財調査報告書第 9 集』では、発掘調査により判明した氷池の構造について次のように説明する。

今回の氷池の調査で特筆すべきことは、氷池の板囲いのかわりに人工的にカットした石が使われていた点で、これは、付近が石切り場であったことと関係がある。遺物包含層に砂層が多いのは、高田氏がいう「氷池の底に敷かれた砂」に相当する。引水方法については、遺物中に木製の樋や鉄製導水管の破片を検出しており、遺構よりも下層に川の痕跡が確認されるので、川水を引き上げて水をためたと考えられる。

(生駒市教育委員会『生駒市文化財調査報告書第9集』1989年, 12-13頁)

これは、史料⑤にある「第5条 自然氷採取池ノ構造ハ左ノ各項ニ從フベシ 一、氷池ノ周囲ハ石垣又ハ板堰トスルコト 二、氷池ノ深サハ水面ヨリ最浅三尺以上トシ池底ハ砂利石（厚サ三寸以上）ヲ散布スルコト 三、氷池ノ堤防ハ地平面ヨリ一尺以上ノ高サヲ有セシムコト 四、氷池ノ満水点ニ排水口ヲ設ケルコト 五、氷池及ビ水道ニハ適宜汚水及土砂灰塵ノ排除法ヲ設クルコト 六、氷池ノ周囲ニハ三尺以上ノ明地ヲ存シ其地上一面ニ小石ヲ散布スルカ又ハ芝ヲ植工付ツケルコト」という規定にしたがつたものだと考えられる。史料⑧からは史料⑤に基づき石垣工事が行われたことがみえ、そのような観点から『大東市史（近現代編）』に掲載された氷池の写真を見れば、確かに池の端部に石垣が確認できる。

史料⑨は「凍氷浜出帳」であり、明治39年から明治43年度までの記録が記されている。1月の下旬の日付で浜出（出荷）されており、この頃には『大東市史（近現代編）』にあるように、夏期まで龍間の氷室で保管していたのではなさそうである。

史料⑩⑪は、凍氷運搬賃金表である。

史料⑫は、「明治四十年十月我等製造者に於いて製造販売取締の為、製出人一致団結し協議上決定仕口依て契約を設たる條項左の如し」とあり、以下、組合に関する記述が続く。

史料⑬は、明治41年4月に大阪北区中之島六丁目の龍紋氷室から差し出された回状である。3月で氷の取引契約が満期になること、挨拶に行きたかったが「中之島の製氷工場」の工事があったことなどが述べられている。史料⑬から、明治41年まで龍間の氷は、龍紋氷室に卸されていたことがわかり、また機械工場の竣工を機に契約を打ち切ったこともみてとれる。この回文の末尾にある芳名からは、龍間ににおいて、29名の人物が龍紋氷室との契約にかかわっていたことがわかる。

これをもって龍間における天然氷の衰退と人造氷の時代が始まったといつても過言ではない。

史料⑭は、文中に明治42年製氷株式会社発起人とあり、事業計画のようなものが綴れている。しかし、発起人の名前がないこと、年号の下に「月日」とありながら、具体的な日付が書かれていないため、草稿かと思われる。

龍間神社の境内には、昭和5年に奉納された「天然氷記念」という石灯籠がある。また『龍間戦争記』（樋口清春編、1991年、228-230頁）では、昭和19年に初年兵として入営した高木賢次氏が、班長から「龍間の寒氷」を知っているかと問われ、「家で小さい時につくっていました」と答えている。このことから、明治41年以降も、昭和5年頃まで氷業は続いていたのだと推測される。

5. まとめ

明治3年、中川嘉兵衛が函館五稜郭の氷を京浜に輸出することに成功し、明治10年代に内国勧業博覧会で龍紋褒章を受けると、氷業は一気に過熱する。次第に、函館五稜郭だけではなく、日本各地で採氷が行われるようになり、古代において氷室が置かれたと推定される大東市龍間もその一つであった。これ以降、龍間における氷業が始まると、これまで、当時を知る個人からの聞き取り調査が中心で、氷業の全容を知る報告はされてこなかった。今回は龍間氷関係文書から、少なくとも明治21年には氷業がはじまっていたこと、現地の世話役である「肝煎」が任せられていたこと、明治41年に製氷工場が竣工し

たことにより、龍紋氷室との契約が満了したことなどを新たに知ることができた。

史料②③④を丁寧に読めば、当時の氷池の規模が明らかになる。また、⑫⑯が翻刻されれば、組合が必要になった要因や、大口の契約を失った後の計画がわかるものと思われる。しかしながら、筆者の力量には余るので、後学の研究に委ねることにする。

ところで、近代になってから、古代に氷室が置かれたであろう大東市龍間で氷池が作られたというのは偶然であろうか。もちろんその立地が、出荷地への距離や寝屋川を利用した舟運という点でアドバンテージとなったのは確かだろう。しかし、実はそれ以上に重要なことは、水質のような気がしてならない。六甲（兵庫）も大坂城築城の際に花崗岩を搬出した地であり、花崗岩を通った地下水は「灘」の酒を造る名水として知られる。大東市龍間でも花崗岩が搬出されたことは冒頭述べた通りで、その山麓にあたる大東市寺川で、伏流水を利用して酒造りが昭和 10 年代まで行われていた。こうしてみると、古代に氷室が置かれたのも、都から近いこと、標高があり寒冷であることという立地条件だけではなかったのではないか。

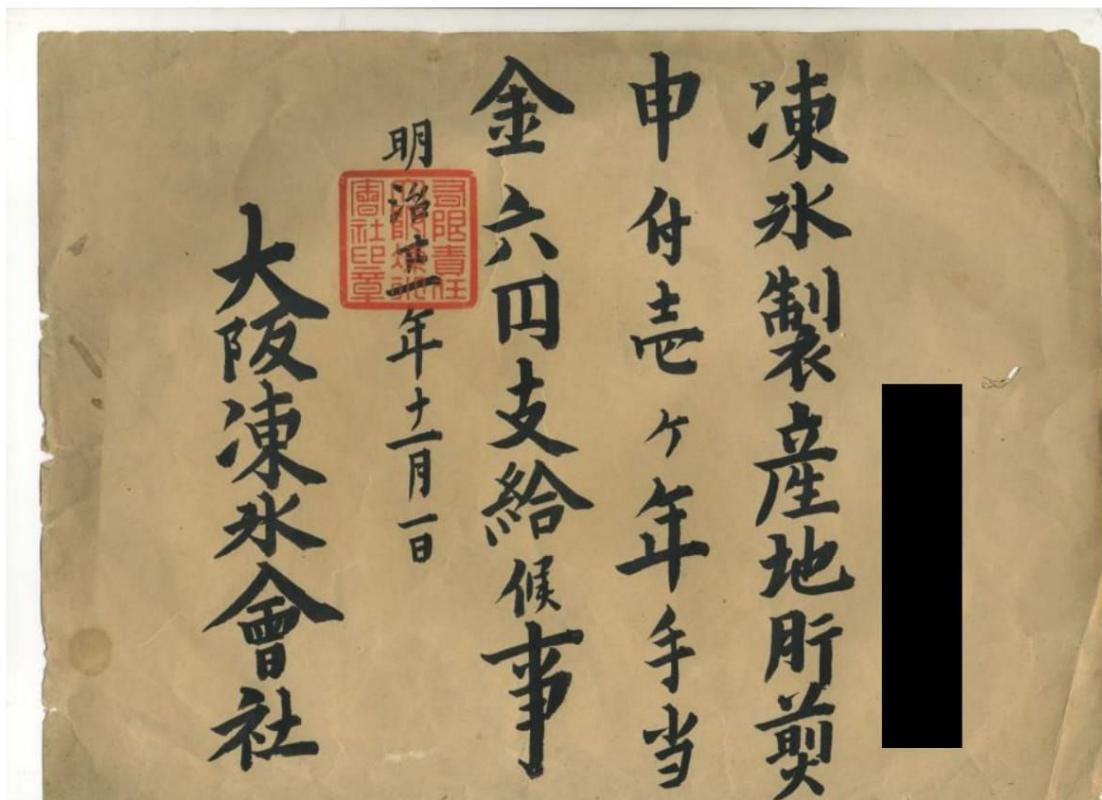
このように、地域の歴史を日本氷業史のなかに落とし込んでみると、地域の歴史をみていただけではわからないことが見えてくる。そして、日本氷業史という大きい流れのなかでは、一つ一つが小さくてよくみえなかつたものが、まとまりとして意味を持つような気がしてならない。今後は、他の古代氷室と地域の産業との関わりなど共通項を見出すことが可能であるのか否か、研究を進めていきたい。

追記：本稿脱稿後、「龍間大文字屋龍田川」の西尾氏を介して、龍間氷関係文書旧蔵者である北畠氏と連絡をとることができた。そこで改めて、北畠氏の了承のもと、同文書を公開させていただいた。

註

- 1) 大東市教育委員会『大東市埋蔵文化財調査報告第 32 集 石切場跡発掘調査報告書—徳川大坂城再建築工事関連の石切場跡調査—』2012 年, 9—17 頁
- 2) 残念石研究会『龍間の石工用具と石材業一生駒山地西斜面における石材業の調査—』2017 年に詳しい。
- 3) 高田十郎「大和の「生駒氷」前田直治郎氏談」『大和志』9 卷 4 号, 1942 年
- 4) 篠田統「寝屋川の舟運」『風俗』第 9 卷第 1 号, 1970 年, 『まんだ』所引
- 5) 例えば、『延喜式』(卷四十 主水司) には「河内国讚良郡讚良一所。四丁輸一駄。」とあり、氷室が置かれていたことがわかる。また『日本紀略』所引『日本後記』(天長八年八月) には、「乙酉。山城河内両国各加置氷室三宇。供御闕乏也。」とあり、新たに氷室が増設されたことが記されている。
- 6) 大西源一「氷室考」『芸林』第十二卷, 1961 年, 福尾猛市郎「主水司所管の氷室について—猪熊信男氏蒐集文書の紹介をかねて—」『日本歴史第 178 号』1963 年, 他に井上薰「都郡の氷池と氷室」『ヒストリア』85 号, 1979 年, 19—20 頁でも、『大阪府全志』や『河内名所図会』の記述により、室池を『延喜式』にある讚良氷室に相当するとしている。
- 7) 函館市史編さん室『函館市史 函館市史 通説編 2』1990 年, 1056 頁
- 8) 前掲, 函館市史編さん室, 1060 頁
- 9) 前掲, 函館市史編さん室, 1061 頁
- 10) 遠山景澄編『京浜実業家名鑑』京浜実業新報社, 1907 年, 468 頁, 島田福太郎『成功者と其人格：処世修養』春江堂, 1911 年, 26—27 頁
- 11) 田口哲也『氷の文化史』まな出版企画, 1994 年, 204 頁
- 12) 前掲田口, 203 頁

- 13) 長塩哲郎『京都氷業史』全国事業新報社, 1939年, 19頁、内山例之助『北海道案内』万巻堂, 1903年, 64頁
- 14) 前掲, 内山, 64頁
- 15) 高宇「戦間期における食料品生産流通環境の変化と企業対応－大日本製氷と帝国冷蔵－」『立教経済学研究』第58卷第4号, 2005年, 175-176頁
- 16) 長塩, 14頁、
- 17) 前掲井上, 30頁
- 18) 前掲長塩, 33頁、他『京浜実業家名鑑』にも山田啓助の項に「天然氷の伐採権を一手に握りて（中略）六甲山生駒山の夫れをも併有し」とある。
- 19) 前掲長塩, 19頁、
- 20) 前掲長塩, 19頁



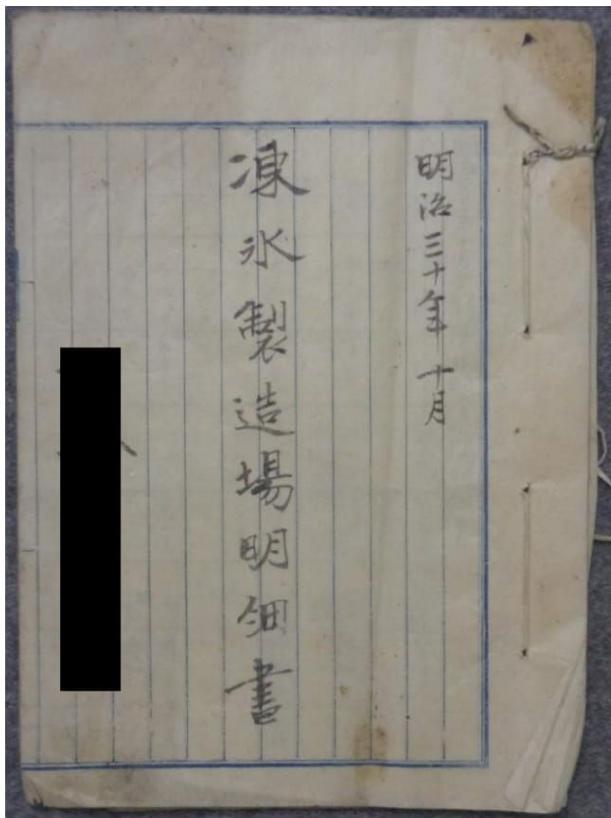
資料①

番號	大後製造場地所	年月日	出數	販別	總額
三〇八	三〇七	三〇六	三〇五	三〇四	三〇三
一	二九八	二九七	二九六	二九五	二九四
九九	一九三	一九二	一九一	一九〇	一九九
四三	一九八	一九七	一九六	一九五	一九四
道	六九八	六九七	六九六	六九五	六九四
道	六九九	六九八	六九七	六九六	六九五
道	阪	阪	阪	阪	阪
道	越	越	越	越	越
一	一五	一六	一七	一八	一九
一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一一五	一一五	一一五	一一五	一一五	一一五
大後漢	大後漢	大後漢	大後漢	大後漢	大後漢
"	"	"	"	"	"
一五	一六	一三	一六	一三	二九

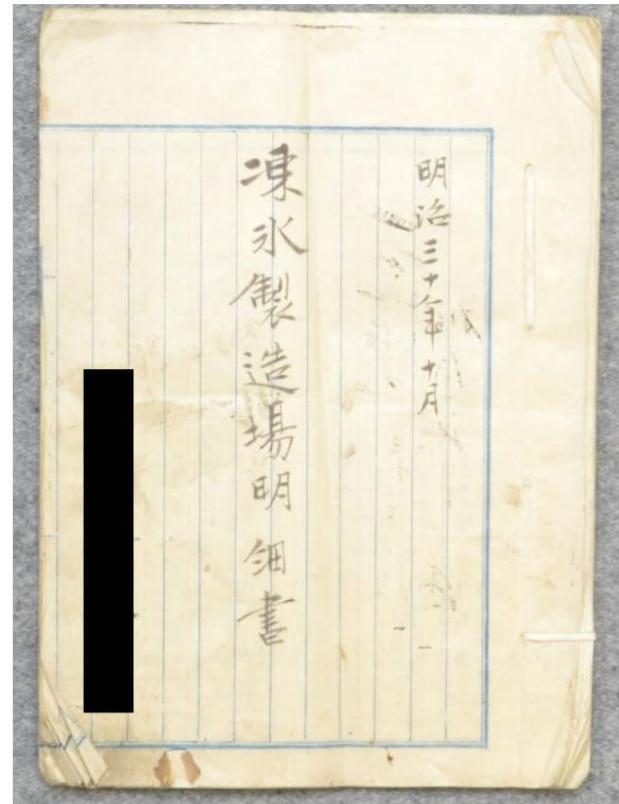
資料②

凍氷製造場明細書					
明治廿一年十一月出願					
年	月	日	出數	販別	總額
明治廿一年	十一月	一日	一	一	一
大後漢	大後漢	大後漢	一	一	一

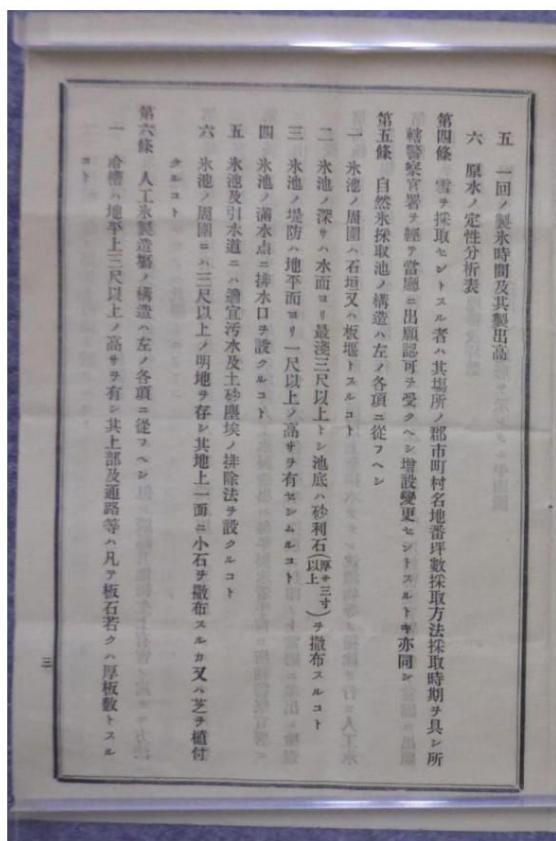
資料②



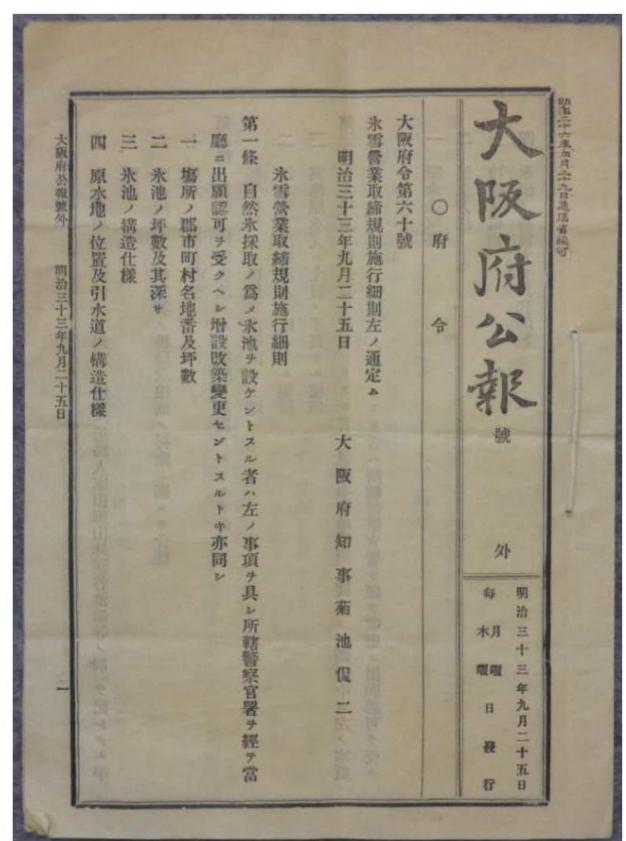
資料③



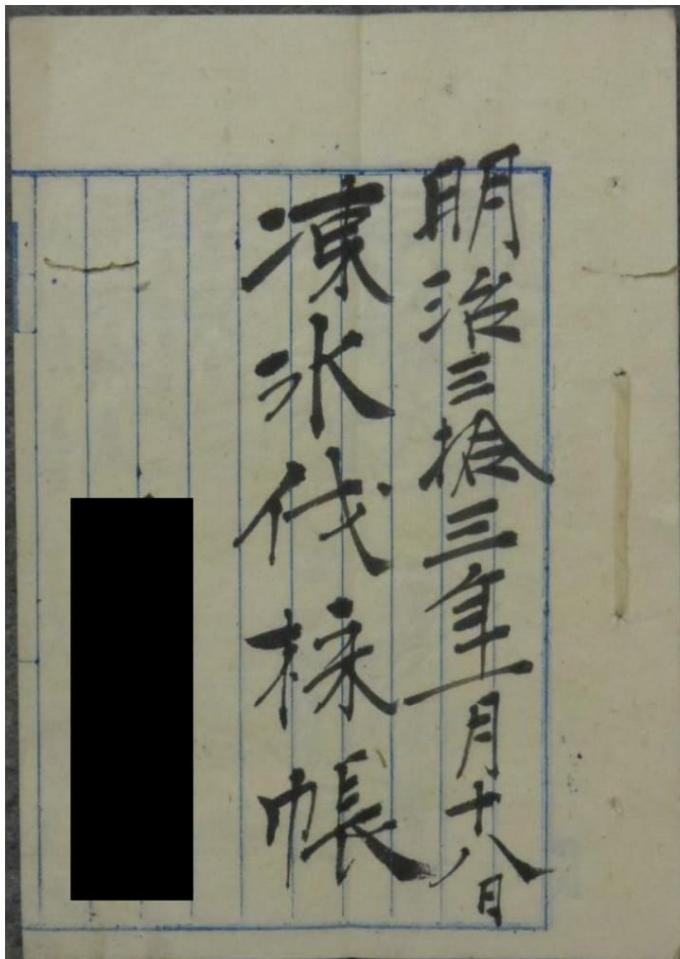
資料④



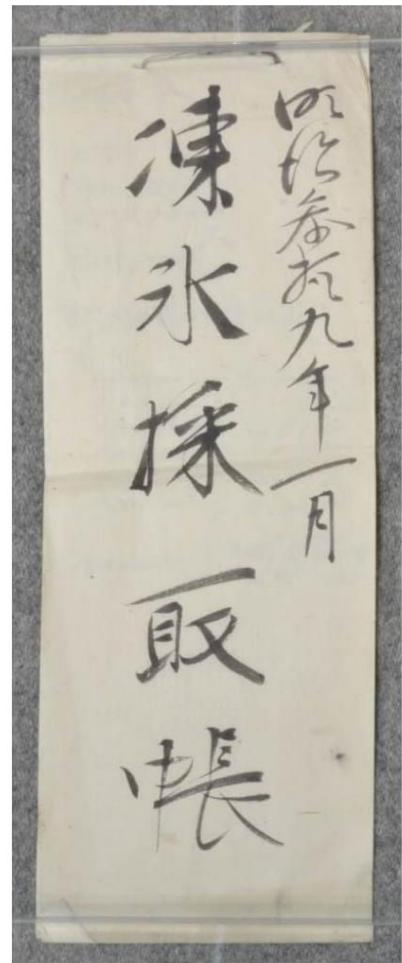
資料⑤



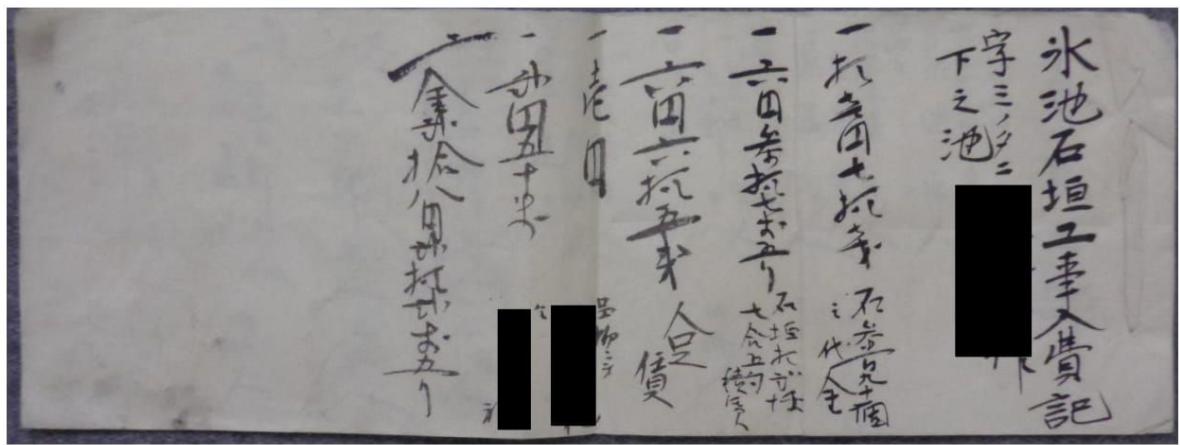
資料⑥



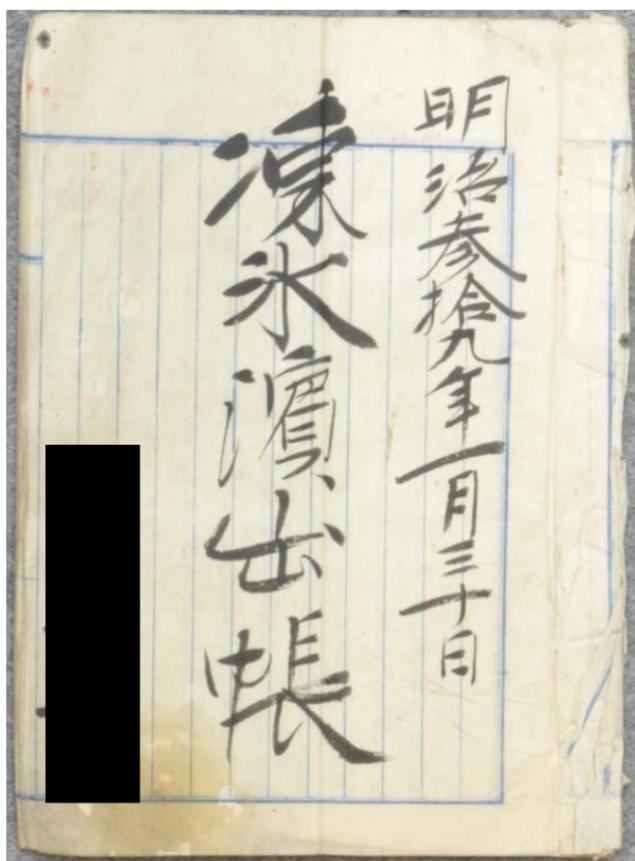
資料⑥



資料⑦



資料⑦



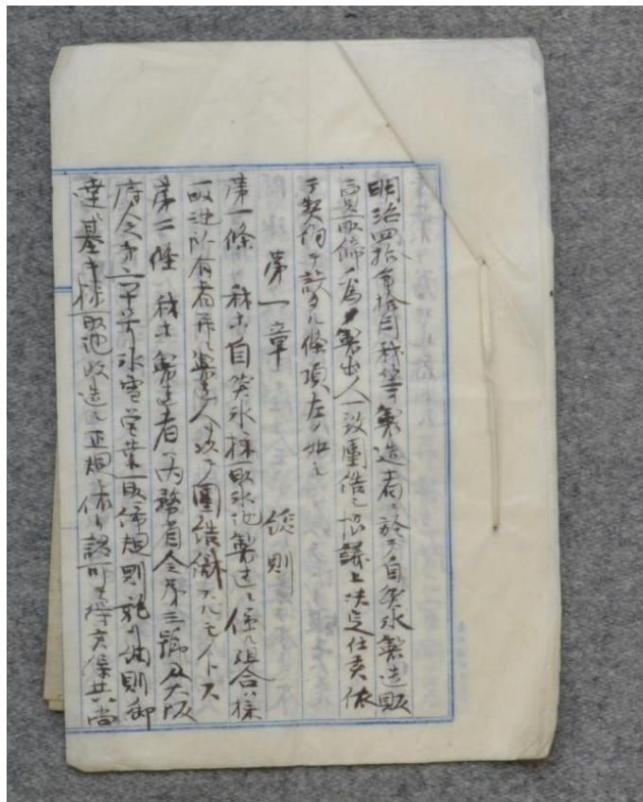
資料⑨

凍冰瀆帳		金債	
一	二	三	四
五	六	七	八
九	十	十一	十二
十三	十四	十五	十六
十七	十八	十九	二十
二十一	二十二	二十三	二十四
二十五	二十六	二十七	二十八
二十九	三十	三十一	三十二
三十三	三十四	三十五	三十六
三十七	三十八	三十九	四十
四十一	四十二	四十三	四十四
四十五	四十六	四十七	四十八
四十九	五十	五十一	五十二
五十三	五十四	五十五	五十六
五十七	五十八	五十九	六十
六十一	六十二	六十三	六十四
六十五	六十六	六十七	六十八
六十九	七十	七十一	七十二
七十三	七十四	七十五	七十六
七十七	七十八	七十九	八十
八十一	八十二	八十三	八十四
八十五	八十六	八十七	八十八
八十九	九十	九十一	九十二
九十三	九十四	九十五	九十六
九十七	九十八	九十九	一百

資料⑩

凍冰瀆帳		金債	
一	二	三	四
五	六	七	八
九	十	十一	十二
十三	十四	十五	十六
十七	十八	十九	二十
二十一	二十二	二十三	二十四
二十五	二十六	二十七	二十八
二十九	三十	三十一	三十二
三十三	三十四	三十五	三十六
三十七	三十八	三十九	四十
四十一	四十二	四十三	四十四
四十五	四十六	四十七	四十八
四十九	五十	五十一	五十二
五十三	五十四	五十五	五十六
五十七	五十八	五十九	六十
六十一	六十二	六十三	六十四
六十五	六十六	六十七	六十八
六十九	七十	七十一	七十二
七十三	七十四	七十五	七十六
七十七	七十八	七十九	八十
八十一	八十二	八十三	八十四
八十五	八十六	八十七	八十八
八十九	九十	九十一	九十二
九十三	九十四	九十五	九十六
九十七	九十八	九十九	一百

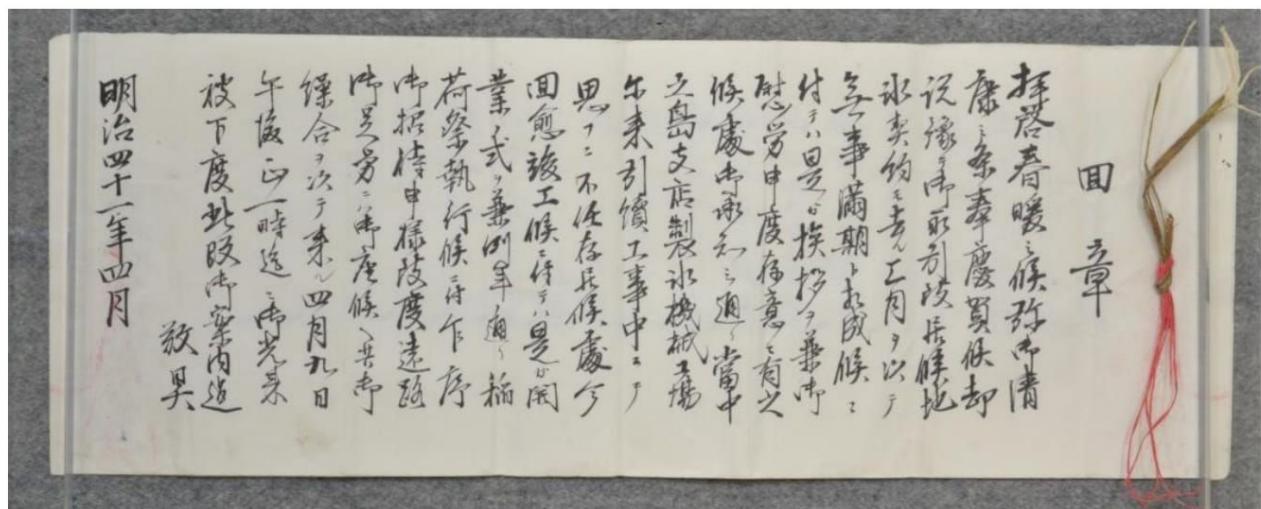
資料⑪



資料⑫



資料⑬ 封筒

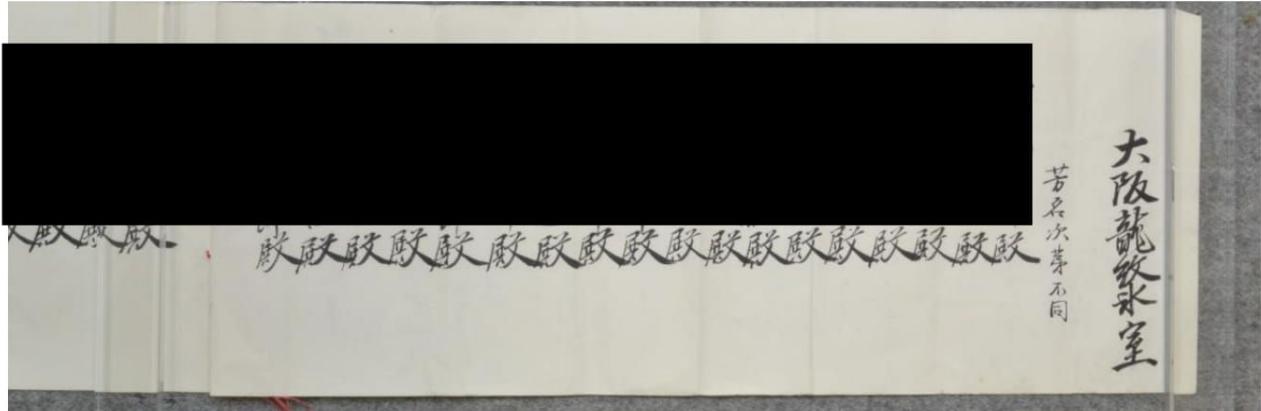


明治四十一年四月

啟異

回 章

芳名次第不同



資料⑭

展覧会「ちょっとむかしのくらし おうちの道具のうつりかわり」の制作と実施

河島明子

1. はじめに

大東市立歴史民俗資料館（以下、当館）では、昭和のくらしをふりかえる趣旨の展覧会を定期的に開催してきた。前年度の平成27年度には、市民学芸員とともに企画から制作までを行い、展示内容の焦点を小学校第3学年が社会科で学習する単元「昔の道具とくらし」に絞った。企画展「ちょっとむかしのくらし～きくえさんのいちにち～」である¹。

ところで、当館の市民学芸員は、二つの事業を柱にしている。学芸員提案事業と市民学芸員提案事業である。前者は、資料館の学芸員が市民学芸員に参加を呼びかけて行う事業、後者は市民学芸員同士による自主的な事業である。平成28年度の学芸員提案事業は5件、市民学芸員提案事業は4件だった。年度当初に年間計画等を発表し、市民学芸員は各々の興味に応じて登録する。

本稿で扱う展覧会「ちょっとむかしのくらし おうちの道具のうつりかわり」（以下、本展）は、平成28年度の学芸員提案事業の一つ、「学校と博物館のよりよい関係つくり隊」（以下、博学連携隊）の成果として位置づけられる。平成27年度に引き続いて、同様のビジョンをもってスタートした博学連携隊が、どのような過程を経て、どのような展覧会へと結実したかを本稿で述べていく。

基本情報

名称：展覧会「ちょっとむかしのくらし おうちの道具のうつりかわり」

会期：平成29年1月21日（土）～3月5日（日）

会場：大東市立歴史民俗資料館 企画展示室

主催：大東市立歴史民俗資料館

企画制作：大東市立歴史民俗資料館

市民学芸員「学校と博物館のよりよい関係つくり隊」

関連事業：「こどもれきみんカーニバル」平成29年3月5日（日）

2. 12か月のあゆみ

博学連携隊の一年間の活動は表1のとおりである。おおまかには、博物館の展示について学ぶ座学や見学会を経て、展覧会のテーマ設定等の企画、資料選定、制作を行う流れである。学芸員提案事業は、月1回2時間の活動を原則としているが、展覧会の準備期間と開催中は、活動日を別途設定した。博学連携隊に登録していない市民学芸員にも参加を呼びかけた。

特筆すべきは、ふりかえりからスタートした点である。前年度より継続したメンバーからは、経験をふまえた改善点やイメージが語られた。さらに、展覧会を企画する段階で少人数になっていた点、展示室で設営作業できる日数が少なかった点が前年度とは異なっていた。前年度は8名前後を推移していたのに対し、今年度は5名。展示室での作業は、前年度が約1ヶ月に対し、今年度は3日だった。少人数の体制の結果、各自が一つのテーマを設定して主担当となり、展示室を分け合うかたちとなった。また、前年度のように、展示室に資料をならべながら、メンバーと意見を出しながら試作と実験を繰り返することはできず、展示室での共同作業を最小限にせざるを得ない状況であった。なお、年度途中に筆者が主担当となったことも補足しておく。前年度から継続していた担当者から、9月に筆者が引き継いだ

3. 展覧会の内容

本展は4つのテーマ「ちょっとむかしの居間と台所」、「ちょっとむかしのなつとふゆ」、「戦中のくらし」、「おうちの道具のうつりかわり」から成る。展覧会の構成と展示物は表2を参照されたい。なお展示物は収

蔵資料に限らない。

住まいの再現を目指した「ちょっとむかしの居間と台所」(図1)では、居間の仕様や展示物のほとんどは前年度を踏襲しつつ、「きくえさん」でなはい不特定の家族を想定した。井戸や洗濯という屋外でのできごとも同展示室にまとめて、屋内との関連性をわかりやすくしている。「ちょっとむかしのなつとふゆ」(図2、図3)では、前年度に夏の道具を出さなかったことをふまえ、暑さや寒さをしのぐための道具と工夫をふんだんに取り入れた。「戦中のくらし」(図4)は、衣食住という視点で資料を厳選した。また、造り付けのガラスケースを住まいに見立て、灯火管制やガラス戸の飛散防止の様子を展示した。「おうちの道具のうつりかわり」(図5)では6つの道具の変遷を資料とイラストで示した。これは、前年度の教員向けの事後アンケートで多く寄せられた要望を実現した。さらに、お菓子や食べ物、生活用品、漫画やアニメに着目した年表を掲示して、来場者が思い出を書き残すコーナーを設けた(図6)。

前述のとおり、市民学芸員各自がテーマを一つずつ担当するかたちとなつたため、展覧会に一貫性をもたせる工夫を、筆者が思案することにした。男女の子どもを主人公に設定して、2人が「むかしのくらしたんけんたい」として疑問をさぐるストーリーとしたのは、その工夫の一つである。導入では、前年度のあいさつ文を転用したムービーを作成し、2人とともに探検へ誘う内容とした。展示室には、小学3年生の身長大の2人のパネル(図7)を随所に登場させて、展示全体に統一感をもたせた。

4. 市民学芸員が生む相乗効果

本展には、市民学芸員による工夫が随所に施された。

「ちょっとむかしの居間と台所」では、「かまどの使い方」、「ごはんの炊き方」、「洗濯の仕方」について、手順を説明するパネルの提案があった。これをふまえ、説明に登場する道具を、展示室で見つけてもらう「道具さがし」というクイズにした。また、前年度に引き続いて体験用の井戸を設置したが、安全性と雰囲気を重視して、前年度の単管パイプから木材に作り替えた(図8)。さらに、居間のスペースには、体験用のシュロ製ハエたたきを置いた(図9)。幼少のころに作った経験のある市民学芸員による。やはり市民学芸員による手作りのフェルト製のハエを叩いて、使い心地を確かめたのち、「ちょっとむかしのなつとふゆ」へ進むと、展示してある収蔵資料のシュロ製ハエたたきに気付くという仕掛けである。シュロの葉の写真も紹介して、植物を利用した生活の道具にスポットを当てた。

「ちょっとむかしのなつとふゆ」では、夏の道具を、暑さのしのぎ方で分類した。「温度を下げる」、「体をひやす」、「風をおこす」、



図1 ちょっとむかしの居間と台所



図2 ちょっとむかしのなつとふゆ



図3 ちょっとむかしのなつとふゆ



図4 戦中のくらし

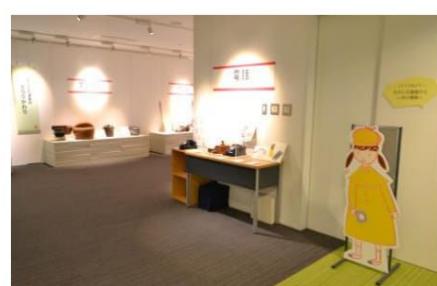


図5 おうちの道具のうつりかわり

「風情をたのしむ」等である。この小見出しを、短冊形にして吊り下げた。冬の道具の小見出しは「みんなであったまる」、「ひとりであったまる」、「あつたまってねる」である。小見出しによって、大まかな用途をつかめるようにした。イラストの多用のみならず、たらいにはスイカ（紙粘土製）を入れ、こたつには布団を掛け、火鉢にやかんや餅を乗せるなど、道具を使う情景を直感的につかめるようにした。「あつたまってねる」では、フェルト製の道具のミニチュアを、ふとんに入れかえて遊びながら、使い方を理解することができる（図 10）。

「戦中のくらし」で、ガラスケースを住まいに見立てアイデアと制作は、市民学芸員が衣食住を図解した文献を厳選したことによって実現した。

「おうちの道具のうつりかわり」は、説明パネルのために、詳細なリサーチがなされた。豊富な情報を生かしつつ、来場者が展示から情報を得やすいようにした。キャプションには、その道具が登場したきっかけを一文で示した。詳しい解説文のうち、便利になった点を強調するために色付けをし、「にっこりポイント」と名付けた。さらに、観察や体験によって、道具の特徴に気付いてもらうことを促すために、クイズ形式のパネルも設置した。パネルは、開く仕組みになっていて、答えと詳細な解説を確認できる。このテーマ内でとりわけ特筆すべきは、体験可能なダイヤル式電話機、いわゆる黒電話である。2台をつないで通話できるようにした（図 11）。実現できたのは、市民学芸員の知識と技術による。受話器を上げるタイミングや、ダイヤルの使い方が正しくなければ、ベルは鳴らない。来場者は挑戦を繰り返して、ベルが鳴ると喜ぶ様子がうかがえた。

5. スクールプログラム

本展の開催期間中に見学のあった小学校第3学年の団体は、大東市内13校（私立を含む）のうち7校であった。当館では、学校団体向けのプログラムを「スクールプログラム」として提案している。事前の打合せを行い、学校からの希望と滞在時間を考慮して、クラス数分の活動を計画する。

利用状況は表3のとおりである。C小学校の活動Bのように、収蔵庫の見学と常設展示室の見学を組み合わせて一つの活動とするケースもあった。

企画展示室は本展の会場である。企画展示室の見学では、活動時間とワークシートの有無に応じて、冒頭に導入となる解説を行ったのち、自由に見学する時間を設けた（図12）。自由見学時には、市民学芸員が子どもたちからの質問に答えたり、体験を促し、資料を観察するきっかけとなるような言葉掛けを行ったりした。企画展示室の見学以外で利用が多かったプログラムは、収蔵庫の見学と「洗濯板で洗濯たいけん」（以下、洗濯体験）（図13）である。



図 6 みんなの思い出年表



図 7 むかしのくらしたんけんたい



図 8 体験できる井戸



図 9 体験できるシロ製ハエたたき



図 10 道具を使う情景を遊んで学ぶ

洗濯体験は、洗濯板を使ってどのように洗濯していたかを、実験と推測を繰り返して考えていくという一連のプログラムのため、40分程度を要する。1クラスの活動時間がそれ以下の学校では実施できず、出前授業での利用を希望する学校もあった。「むかしの写真みてみよう」は、写真を使って時代の変化を解説するプログラムである。校区内の風景や市内のランドマークを盛り込むなど、子どもたちに身近な場所を選び、親しみやすい内容にした。

教員向けの事後アンケートでは、資料を実見できた点、体験できた点を評価する記述が目立った。学校では不可能な部分を、資料館が補えたと言える。企画展示室には道具の使い方を体験できるコーナーが6つあった。井戸、火吹き竹、蚊帳、一升瓶での米つき、黒電話、氷冷蔵庫である。イラストで体験できることをわかりやすく示した(図14)。なかでも黒電話は順番待ちの列ができるほど人気だった。黒電話の体験に時間を要することも理由の一つだろう。子どもたちの様子を観察すると、操作の手順が複雑なうえ、ベルを鳴らして相手と一言交わして成功するまで、何度も挑戦していた。展示室を見学する15分程度のうち、大部分を黒電話の体験に費やす子どもも多かった。体験が学びを深めるのは言うまでもないが、その一方、体験はできないが、観察すると興味深い資料も多い。クイズ形式のパネルを設置する工夫をしてみたが、点在する体験コーナーに注目が集まり、うまく機能せず課題として残った。観察を促すような導入での言葉掛け、ワークシートでの関連付けを見直していきたい。

6. むすび

本展には、学校団体の利用を含めて、2577人が来場した。筆者の記憶によれば、一般的の来場者は、孫や子を連れた多世代での来場が多くかった。博物館が資料を介したコミュニケーションの場と言われるが、本展ほどふさわしいものはないだろう。民具のなかでも、とりわけ日用品が多く出品されるため、昭和世代の来館者は当事者として語ることができる。学校団体による見学においてもそうである。子どもたちは、昭和世代の市民学芸員から語られる「わたしが子どものときには…」というようなエピソードを聞くことで、その道具が生活空間にあり、使われている情景を具体的に思い描くだろう。さらに市民学芸員は、自分自身のエピソード以外に、展示制作の過程で得た情報を伝えることもできる。このようなコミュニケーションによって生じた気づきや学びは、資料館を利用するメリットの一つだが、学校から重視する要望は少ない。

来年度も同様の展覧会を予定している。本展のような学校団体の利用を主なターゲットとする展覧会が、学校の学習内容に沿うという点のみならず、市民学芸員の存在や、市民学芸員とのコミュニケーションによってどのような学びが起こるかという点においても、利用の長所であることを整理して知らせていきたい。



図11 黒電話を体験する様子



図12 企画展示室での導入の様子



図13 洗濯体験の様子



図14 体験できることを知らせる表

本展の企画・制作は博学連携隊の市民学芸員—浅野純郎氏、榎幸氏、竹元智子氏、中村義之氏、檜垣一美氏の個性とチームワークによる。構想段階では10名程度の参加があり、各々の視点から活発な意見が交された。また、市民学芸員の氏原稔夫氏、黒川喜和子氏、桑原妙子氏、為則泰明氏、林田恵子氏、水永八十生氏には、展示の制作や学校団体の対応など、多大な協力をいただいた。そのほか、関連事業の運営は、多数の市民学芸員と府内外の博物館等の協力による。末筆となるが、関係した皆様に改めて心より感謝を申し上げる。

註

1) 詳細については以下を参照。

武井二葉、特集「博物館における展示を考える」：民具を考える—企画展「ちょっとむかしのくらしきくえさんちのいちにち～」、博物館研究 2016 vol. 51 no. 8 pp. 10-13

表1 平成28年度「学校と博物館のよりよい関係つくり隊」活動記録

年	月	日	内容
2016年	4月	16日	【第1回】自己紹介、昨年度のふりかえり
	5月	21日	【第2回】博物館の展示を考える
	6月	18日	【第3回】見学会 高槻市立自然博物館・JT生命誌研究館(展示の工夫について)
	7月	16日	【第4回】見学会のふりかえり、今年度の展示について相談
	8月	20日	【第5回】メインゲット・目的・展示内容の決定、資料調査スタート
	9月	17日	【第6回】資料調査経過発表、レイアウトの決定
	10月	15日	【第7回】関連事業の相談、パネルの形態と情報量の確認
	11月	19日	【第8回】資料調査
	12月	17日	【第9回】資料と図面の確認、展示準備スタート
	2017年	1月 10日～	展示準備
		18日～20日	資料の搬入、展示作業
		21日	【第10回】展示解説、学校対応の打ち合わせ
		27日～	団体見学対応(随時)
		2月 18日	【第11回】見学会 堺市博物館(小学校の見学受け入れと展示について)
		3月 4日	関連事業準備
		5日	関連事業
		18日	【第12回】今年度のふりかえり、来年度に向けて意見

表2 展覧会の構成と展示物

1 ちょっとむかしの居間と台所		2 ちょっとむかしのなつとふゆ		3 戦中のくらし		4 おうちの道具のうつりかわり	
(屋外)	(棚)	「夏 温度をさげる」	「夏 風をおこす」	(家)	「電話」	「すいはん」	「アイロン」
洗濯板	鍋	手桶	扇風機	国民服	壁掛け電話機	羽釜	火のし
たらい	漏斗	ひしゃく	団扇	防空頭巾	ダイヤル式電話機	飯かご	こて
井戸一式（製作）★	飯かご	簾	扇子	電灯	ダイヤル式電話機 ★	飯ふご	炭火アイロン
バケツ	ざる	「夏 からだをひやす」	「夏 風情をたのしむ」	箱膳	「すいはん」	飯びつ	電気アイロン
竹ほうき（製作）	せいいろ	氷かき器	風鈴（南部鉄）	汁椀・皿ほか食器類	保温ジャー	しゃもじ	「せんたく」
ちりとり（製作）	鰯節削器	たらい	風鈴（ガラス）	保温式炊飯器	電気掃除機	保温ジャー	石けん箱
(かまど周辺)	手ぬぐい	「夏 虫をさける」	蚊帳 ★体験可	「そうじ」	紙パック式電気掃除機	火こうじ	たらい
羽釜	(居間)	ハエたたき	ハエとり器	「アイロン」	「せんたく」	炭火アイロン	洗濯板
火吹き竹（製作）★	ラジオ	ハエとり器	蚊取り線香	「アイロン」	「冷蔵庫」	電気アイロン	「冷蔵庫」 ★
しゃもじ類入れ（製作）	茶筆筒	蚊取り線香立て	ハエ取りリボン（製作）	「せんたく」	「みんなの思い出年表」	洗濯板	みんなの思い出年表
しゃもじ	針箱	ハエ取りリボン	「冬 みんなであつたまる」	「せんたく」			
竹へら	買い物かご	やぐらごたつ	やぐらごたつ	「せんたく」			
杓子（製作）	おひつ	火鉢	火鉢	「せんたく」			
かまど一式（製作）	キセル	火箸	火箸	「せんたく」			
七輪	煙草盆	五徳	五徳	「せんたく」			
かご	柱時計	鉄瓶	鉄瓶	「せんたく」			
火消しつぼ	ちゃぶ台	サロンストーブ	サロンストーブ	「せんたく」			
火ばさみ	茶碗・汁椀ほか食器類	「冬 ひとりであつたまる」	足あぶり	「せんたく」			
十能	やかん	安全こたつ	安全こたつ	「せんたく」			
鍋	ふすま	こたつ	こたつ	「せんたく」			
(板の間)	筆筒	綿入れはんてん	綿入れはんてん	「せんたく」			
すのこ	竹水鉄砲ほか玩具類	「冬 あつたまってねる」	豆炭あんか	「せんたく」			
まな板	鏡台	湯たんぽ（ブリキ）	湯たんぽ（ブリキ）	「せんたく」			
包丁（製作）	座敷机	湯たんぽ（陶器）	湯たんぽ（陶器）	「せんたく」			
すり鉢	教科書ほか書籍類			「せんたく」			
すりこぎ	そろばん			「せんたく」			
下駄	火鉢			「せんたく」			
(流し周辺)	火箸			「せんたく」			
手桶	柳行李			「せんたく」			
水がめ	衣桁			「せんたく」			
ひしゃく	帽子			「せんたく」			
流し（製作）★	ハエたたき（製作）★			「せんたく」			
すのこ				「せんたく」			
味噌樽				「せんたく」			
漬物瓶				「せんたく」			
ざる				「せんたく」			

※★印は体験可の展示物。

表3 展覧会開催中のスクールプログラムの利用状況

日時	学校名	学年	クラス数	滞在時間(分)	活動あたりの時間(分)	企画展示室の見学	ワークシート	収蔵庫の見学	むかし写真	洗濯体験	常設展示室の見学	その他	内容
1月 27金 午前	A/小学校	3	3	60	20	活動A	使用しない	活動B			活動C	活動C	映像視聴
1月 27金 午後	B/小学校	3	2	90	45	活動A	資料館作成	資料館作成			活動B	活動C	
2月 6月 午前	C/小学校	3	3	140	45	活動A	資料館作成	資料館作成			活動D (出張授業)	活動C	
2月 8水 午前	D/小学校	3	4	90	20	活動A/B	使用しない	活動C			活動A	活動B	図書館見学
2月 10金 午前	E/小学校	3	2	100	50	活動A	資料館作成	資料館作成			活動A	活動B	
2月 16木 午前	F/小学校	3	2	90	40	活動A	学校作成	学校作成			活動B	活動A	
2月 2木 午前	G/小学校	3	2	120	55	活動A	学校作成	学校作成			活動A	活動A	
集計		7校	99分(平均)	39分(平均)		7件	5件	1件	5件	4件	2件		

市民学芸員提案事業「収蔵庫チーム」成果報告

甲斐規予子

1. はじめに

大東市立歴史民俗資料館（以下、当館と表記）の収蔵庫には、平野屋新田会所に所蔵されていた資料が現在保管されている。しかし、調査が済んでいるものはほんの一部で、他はほとんどが未登録資料のまま手つかずの状態で置かれていた。そこで、2015年度から当館の市民学芸員提案事業「収蔵庫チーム」として、市民学芸員が主体となり平野屋新田会所の未登録資料の整理作業に取り組むこととなった。しかし、市民学芸員だけで整理作業を進めることは難しいため、当館の民俗資料学芸員が助言者という形で関わっている。なお、筆者は年度途中に前任者から担当を引き継いだため、2016年9月からこの事業に関わることとなった。

活動は未だに継続中であるため、本稿では現時点までの2年間の活動について筆者の助言者としての立場から、経過報告をさせていただく。

2. 活動内容

当館の民俗資料収蔵庫に保管中の、平野屋新田会所の未登録資料を対象とし、1点ずつ仮番号付け、写真撮影（図1）、調査票の作成（図2）を行なった。毎月2～3回程度のペースで集まり、1回につき2時間の作業時間をとった。

構成メンバーは1年目は7名だったが、2年目は新たに2名増員し、9名となった。

作業はそれぞれ担当を分け、写真撮影と調査票の記入を同時進行で行った。また、毎回全員が参加するわけではないため、作業メンバーに入れ替わりがあった場合でも進捗状況などの情報共有ができるように毎回の作業成果を記録するようにした。

今回の資料整理作業は、当館の民俗資料担当の学芸員が仮番号の付け方や写真撮影の方法、調査票の記入方法などを市民学芸員に教授した上で進めるようにした。調査票に資料情報を記入する際、わからないことがあればその都度学芸員や収蔵庫チームのメンバー同士で相談するように努めた（図3）。

当初の目的であった仮番号付け、写真撮影、調査票の作成が2016年12月時点で完了したため、次に①目録の作成、②撮影した資料写真の整理作業、③調査票のデジタルデータ化（資料情報記入済みの調査票をスキャニングし、パソコン内に取り込む作業）に移ることとした。この作業でも、それぞれで分担し、学芸員が作成したExcelの表に調査票のデータを入力する役、パソコンに取り込んだ資料写真を整理する役とで分かれた。

3. 活動の成果

2017年3月31日の時点では、保管されていた資料すべての写真撮影及び調査票作成が完了し、総計903点の資料があることがわかった。

目録作成については仮番号ひ-1～ひ-800までがExcelの表への情報入力が済み（図4）、②撮影した資料写真の整理作業（図5）は全体の半分ほどまでが進んだが、③調査票のデジタルデータ化は手つかずの状態である。



図1 資料写真

大東市立歴史民俗資料館 民俗資料調査票

調査地	大東市立歴史民俗資料館 平野屋新田会所	仮番号	ひ-500
調査日	2016年1月18日	調査者	橋田
名称	平野屋新田会所	標準名	通帳(かぶら)
用途分類	1.衣 2.食 3.住 4.生産、生業 5.人の一生 6.交通、運輸、通信 7.社会生活 8.専門行事 9.民俗芸能、娛樂 10.信仰、宗教 11.その他	用具	照相機
製作	昭和四〇年一月 製造者名	販売者名	松原(伊勢支店)
由来(家譜 (収納状況)	財産	調査票	平野屋新田会所蔵 渡度出典 「ひ-500」に入っています
寸法 (横×縦)	19cm	重さ	13.3g
写真 (参考) 調査票			

図2 調査票



図3 調査風景

4. 活動の課題と、今後について

作業を進める内に、いくつかの課題が浮上した。中でも、調査票の記入方法の統一がなかなか難しく、良い解決法が見つからないケースも少なからずあった。

そうして妥協した問題点が、後に面倒な問題の要因へと変わることがあった。中でもよく問題になるのが、寸法のとりかたである。立体物が多いため、全長の場合はどの部分からどの部分までを測るのか、資料の縦と横を決める際の基準はどうするか、資料の正面をどこだと捉えるのか、そういう認識の違いを埋めることができ難であった。同様の資料であっても、調査票を作成した人によって用途分類にはらつきがあることが度々あった。

こうした問題を解決するには、こまめな情報共有が必要であり、作業進捗の共有だけでなく、記入した調査票を全員で見直すという作業も大切なことであった。

今後の活動としては、作業中である①目録の作成、②撮影した資料写真の整理作業、③調査票のデジタルデータ化を全て完了させることが第一の目標である。筆者も引き続き、助言者の立場から事業に関わっていきたい。

註

1) 平野屋新田会所は、2008年に行われた宅地開発のため解体工事が行われ現在はその跡地の一部が残っている。会所解体にあたり避難させてきた資料が当館に保管されている。

A	B	C	E	F	G	H	I	J	K
調査地	仮番号	調査日	名 称(地図名)	名 称(標準名)	用 途分類	紀 経路	製造者路	材 質	由来実態
大東市立歴史民俗資料館 民泊施設	ひ-1	2015年7月28日		木箱(大)	2食	無	不明	木	旧平野屋新田会所所蔵 調査品類
大東市立歴史民俗資料館 民泊施設	ひ-2~6	2015年7月28日		茶托(煎茶用)	2食×西製品		無	金属	
大東市立歴史民俗資料館 民泊施設	ひ-7~8	2015年7月28日	チョコ	酒杯	2食×西製品	無	むさぼ	陶器器	
大東市立歴史民俗資料館 民泊施設	ひ-9	2015年7月28日		蓋	2食×西製品	無	無	陶器器	
大東市立歴史民俗資料館 民泊施設	ひ-10~12	2015年7月28日		煎茶碗	2食×西製品	無	無	陶器器	
大東市立歴史民俗資料館 民泊施設	ひ-13	2015年7月28日	タンボ	ちろり(鉢)	2食×西製品	無	無	金属	全
大東市立歴史民俗資料館 民泊施設	ひ-14	2015年7月28日	チョコ	酒杯	2食×西製品	無	無	陶器器	
大東市立歴史民俗資料館 民泊施設	ひ-15	2015年7月28日	チョコ	酒杯	2食×西製品	無	無	陶器器	
大東市立歴史民俗資料館 民泊施設	ひ-16	2015年7月28日	チョコ	酒杯	2食×西製品	無	無	陶器器	
大東市立歴史民俗資料館 民泊施設	ひ-17~18	2015年7月28日		蓋	2食×西製品	無	無	金属	
大東市立歴史民俗資料館 民泊施設	ひ-19~20	2015年7月28日	チョーシ	漆利	2食×西製品	無	無	陶器器	
大東市立歴史民俗資料館 民泊施設	ひ-21	2015年7月28日	チョーシ	漆利	2食×西製品	無	無	陶器器	

図4 資料目録（一部）

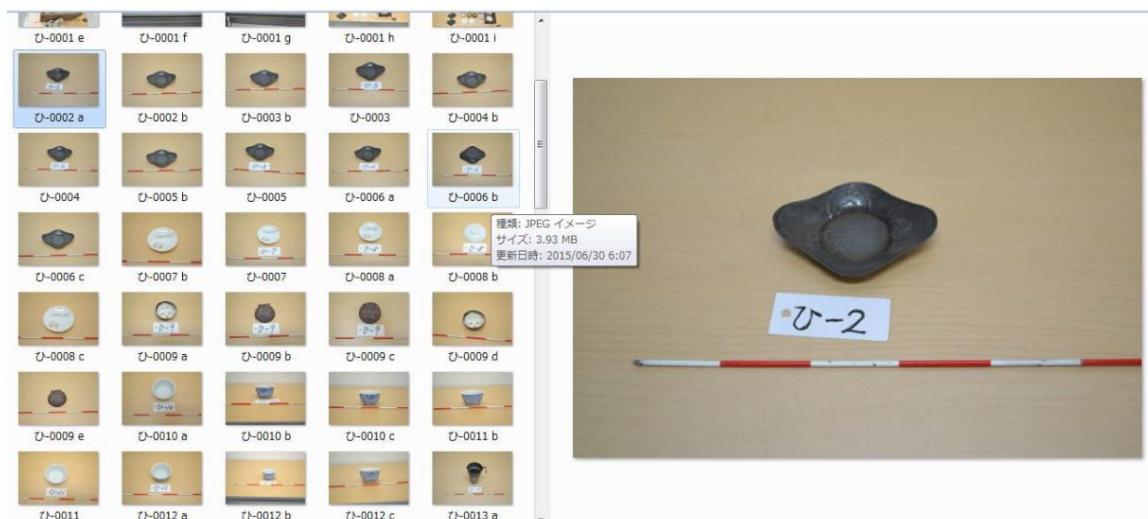


図5 写真整理状況

空間の性格を活用した展示表現

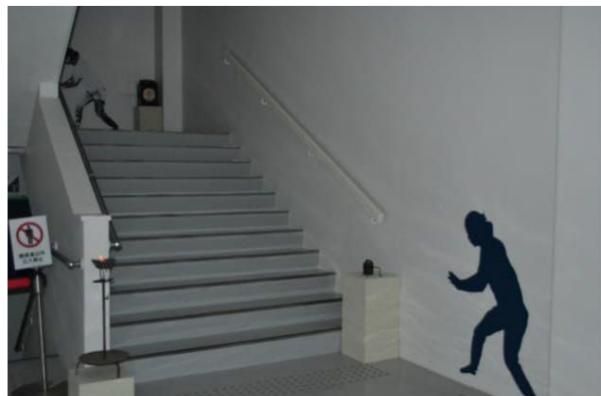
森井綾乃

1. はじめに

当館の展示室は、大東市立歴史とスポーツふれあいセンター2Fと3Fに位置する。2Fには、常設展示室1と2、廊下にハンズオンコーナーの設置される机が等間隔に5台備え付けられている。3Fには企画展示室1と2がある。3階廊下には備え付けの机はないが、展覧会の際は展示スペースとして活用される。これまでに当館では、展示室と名のつかない階段の踊り場のような隙間の空間も、展示スペースとして活用し、2階から3階へ足を運ばせる導線も含めた展示構成を試行錯誤してきた。このように、資料や創作物、パネルなどの設置においては、小回りが利く展示空間であるため、館の空間全体を使って展示の密度を上げられることが、当館の強みであると考える。

そのような中で、筆者は展覧会の雰囲気やイメージカラーとしての役割をもつチラシの制作や、展示物の制作を行っている。展示物を制作するにあたって、展示室の天井まで表現可能と設定したなかで、なるべく迫力を感じてもらえるように大きさを決定し、展示ケースの中だけではなく、ケースそのものにも物語性を付与する、また、展示物だけではなく、展示室そのものにも演出を行うなど、空間の形・広さ・天井の高さ・明るさ等といった、展示空間の性格をなるべく活かすことの出来るかたちとしての表現を試みている。

今回は、平成28年度の展示の中で筆者が担当した展示表現活動について、次章から順にふりかえりたいと思う。



階段・廊下を利用した展示表現（平成27年度「昼からナイトミュージアム」）



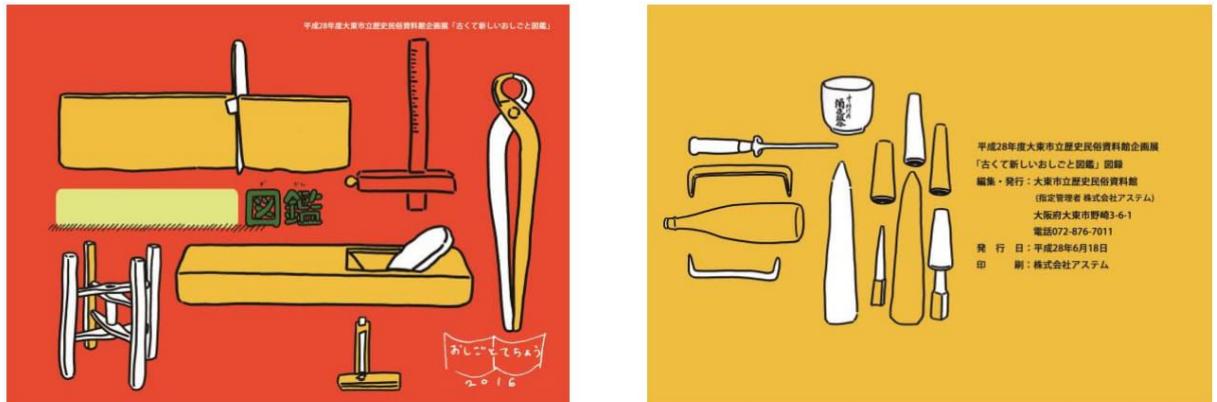
空間全体を使った展示表現(左：「昼からナイトミュージアム」/右：平成27年度「ちょっとむかしのくらしへきくえさんちのいちにち～」)

2. 平成 28 年度企画展「古くて新しいお仕事図鑑」

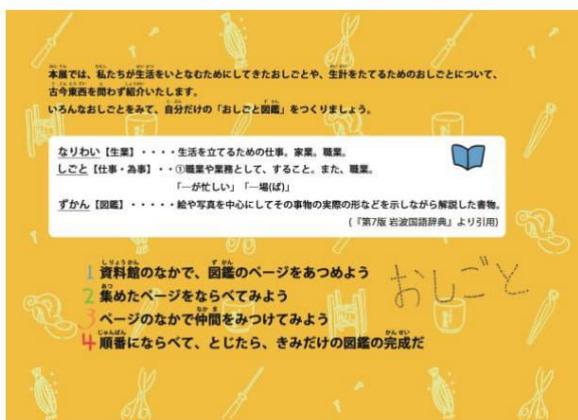
お仕事図鑑展は 6 月 18 日から 8 月 28 日まで行われた子供向けの企画展である。展覧会では、子供が仕事について広く学ぶきっかけとして、大東市内外古今東西を問わず、様々な仕事を紹介した。資料館内には、仕事についてそれぞれの担当学芸員がまとめたページや、お仕事体験用ワークシートとしてのページ、発見したことを自由に記すメモとしてのページなどを、それぞれの展示スペースに散りばめており、来館者はそれらのシートを集めることによって、自分だけのおしごとてちょうを作ることが出来るという仕組みになっていた。

そのような中で筆者は、チラシ制作と、「おしごとてちょう」のデザイン、常設展示室 1 の大画面で上映した「おしごとてちょう」の使い方を提示する導入映像制作、1 階廊下おしごと体験コーナー中の、広報のおしごと体験として、展覧会のチラシを作つてみるコーナーなどを担当した。制作物の色としては、常設展示室 1 で資料館スタッフの中島いぶきが担当した、ランドセルづくりのおしごとコーナーに因んだ赤色と、チラシのメインカラーである黄色を主に用いて制作した。

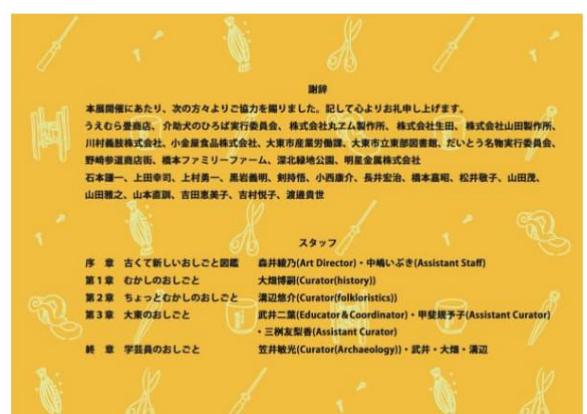
今回、会場入り口の柱のサイズに合わせて、大型プリンターを利用して印刷した展覧会タイトルは初の試みとして制作した。展覧会の入口に赤色の制作物を多く配置することによって、目に入る色の面積を増やし、常設ではない特別な展示としての雰囲気を視覚的に体感してもらえるようにという考え方から、設置した。



「おしごとてちょう」 左:表紙 ／ 右:裏表紙

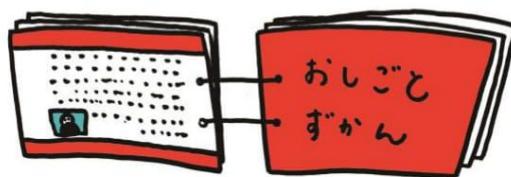


「おしごとてちょう」 中ページ





導入映像を上映中の常設展示室 1 大画面



導入映像



「おしごとてちょう」設置の様子



資料館入口付近

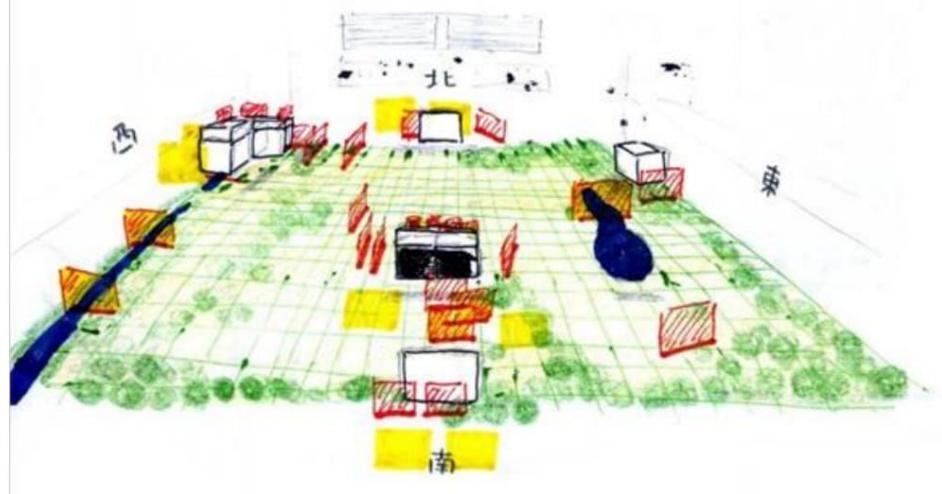
3. 市制施行 60 周年記念特別展「よみがえる平野屋新田会所」

この展覧会は、11月12日から平成29年1月15日まで、大東市市制60周年を迎えたことを記念して行われた。現存しない平野屋新田会所を提示する導入として、資料館入口すぐの常設展示室1に展覧会に合わせて制作された映像と、模型を展示することとなり、筆者はチラシ制作と、模型制作を担当することとなった。模型を置くという行為を、常設展示室1の空間に対してどのような形で実現させるかを考えたときに、まず、模型の大きさをどのように決めるかという観点から、部屋全体を平野屋新田会所敷地全体に見立てる着想を得た。鑑賞者が、模型=屋敷の姿を確認するだけではなく、敷地の中を歩き回って体感してもらおうという試みである。

蔵や坐摩神社、門などの位置を、それぞれの名称と写真を印刷した布を吊り下げる示し、さまざまな角度から撮影されていた記録写真を、敷地の北を展示室大画面側に設定したときに、実際に撮影された方向に景色(写真の中の風景)が見えるように、それぞれの写真の向きを合わせ、展示室内に散りばめて設置した。また、模型の中にもA5サイズの写真をそれぞれの撮影された方向に設置した。記録写真に植物が多く生えている敷地内の様子が記録されていたことから、今回緑をメインカラーとした展覧会のチラシを制作したのだが、パネルや布といった印刷物についても、同じ理由から緑をメインカラーとして選択し、制作した。



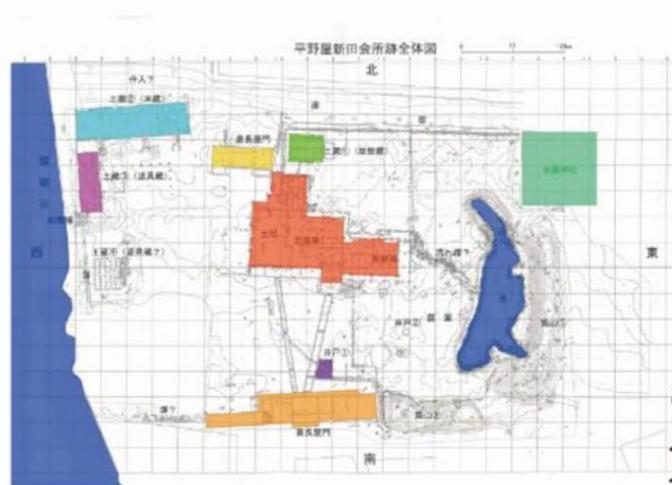
常設展示室1



初期に描いた展示室イメージスケッチ



左:写真配置計画シミュレーション／右:A4サイズ敷地図面で写真配置を試した様子



この展示室では、**かり**
入口側を**南**として、部屋全体を平野屋新田会所跡
全体図に見立てています。



写真がどの場所から撮影されたのか、探しでみよう！

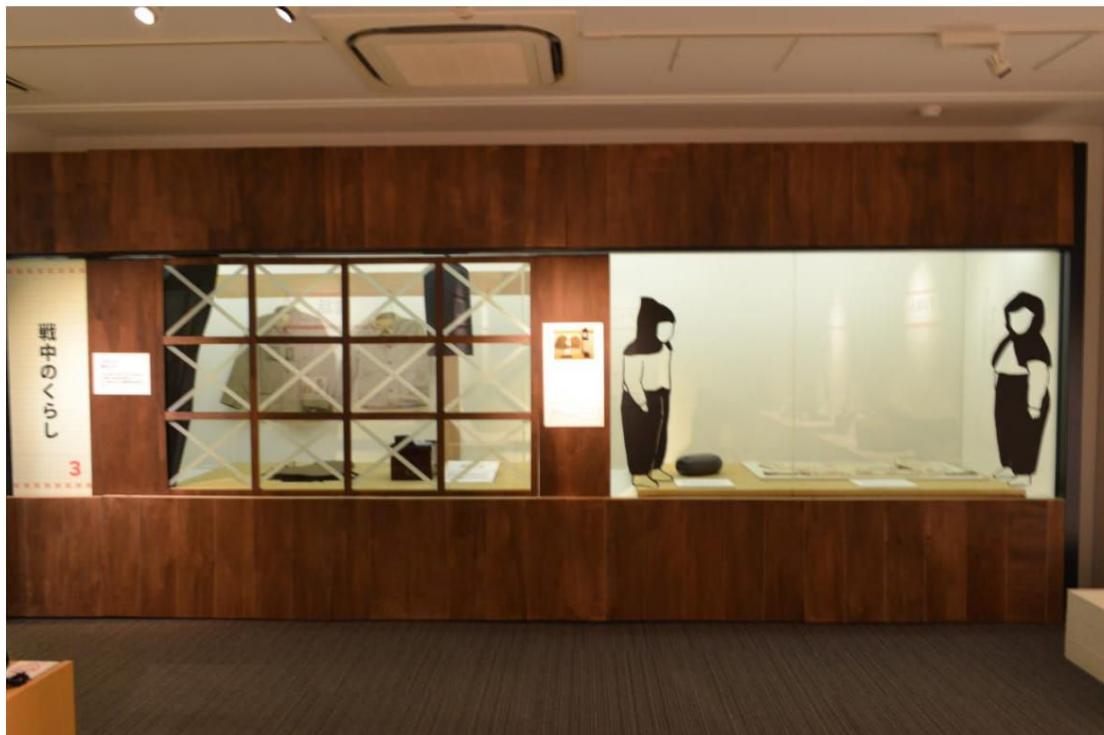


部屋に設置した導入パネル

4. 企画展「ちょっとむかしの暮らし おうちの道具のうつりかわり」展

この展覧会は、平成 29 年 1 月 21 日から 3 月 5 日まで、家のなかで使う道具の移り変わりを紹介する、子供向けの展示として行われた。昨年度の企画展「ちょっとむかしの暮らし～きくえさんちのいちにち～」の際に制作した、企画展示室の大きさに合わせて設えた家のなかを再現するセットの再使用に加え、今年度の展覧会では、幅 5m32cm のエアタイトケース内に、戦中のコーナーとして飛散防止のテープと窓、光漏れ防止の電球カバーを用いて、暮らしに焦点を当てた展示を行いたいという市民学芸員の発案を受け、展示計画の構想を練り、制作した。

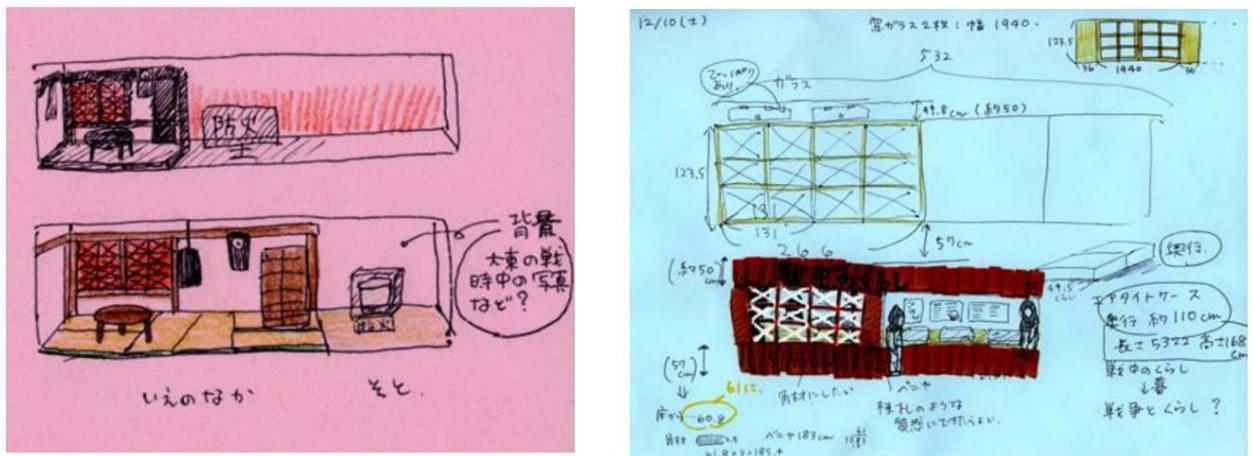
暮らしを表現ということから、ケース内を家の中と見立てて構成することを決めて、ケースのガラスそのものを家の窓のように表現するという着想を得た。また、防空頭巾をかぶった様子がわかるようにという市民学芸員のアイデアから、平成 27 年度なつやすみ展「昼からナイトミュージアム」の際に考案した、人影風に色画用紙を切り抜く手法で制作し、展示ケースのガラスに設置した。ただし、パネル制作は当館学芸員の河島明子によるものである。



企画展示室 2 エアタイトケース 戦中の暮らし

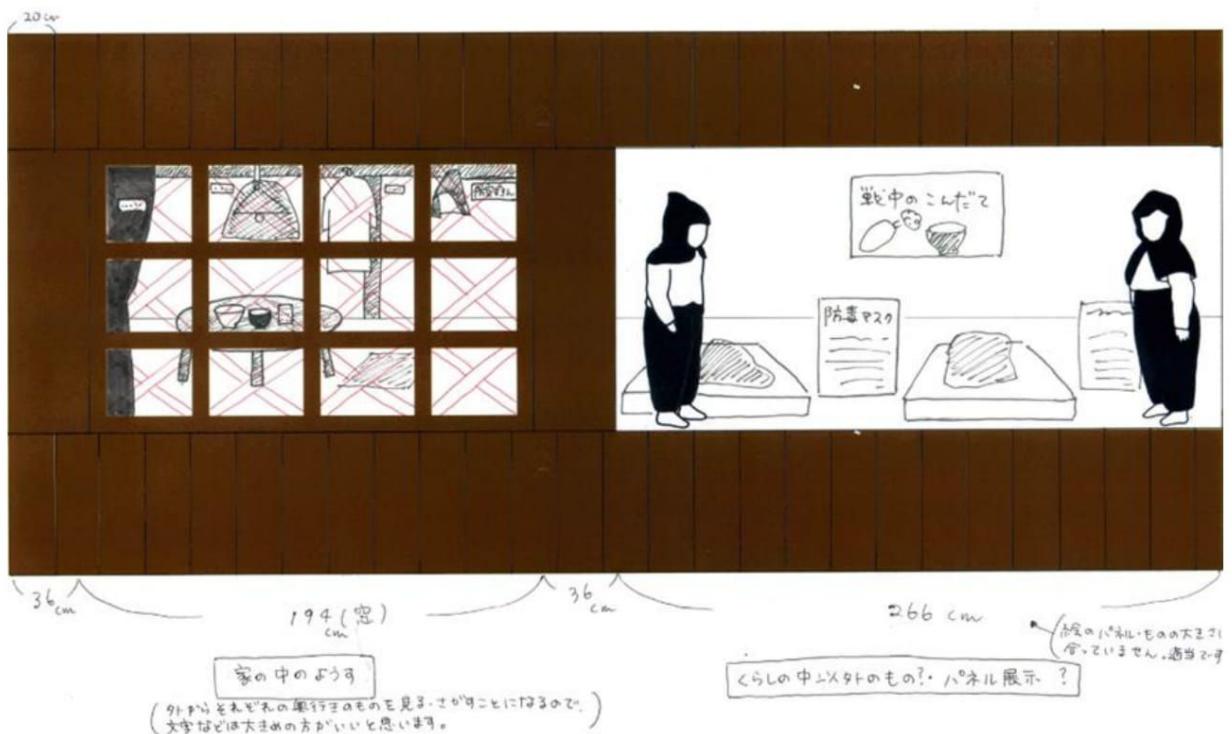


通常時のエアタイトケース使用例として(平成 27 年度春季展より)



初期のアイデアスケッチ

左：ケースの中のみのアイデア段階 ／ 右：ケースの外のイメージが加わる



作図した外観図にスケッチ(最終イメージ図)

5. おわりに

平成 28 年度展覧会においての展示表現では、新たな展示室の活かし方を発見し、表現方法の幅を広げることが出来た。しかしながら、筆者以外のスペースを担当する学芸員との打ち合わせや、進行具合の確認、表現方法の構想と計画、実制作の時間配分等において計画性に欠け、多くの助けを得てそれぞれの展示表現を実現するに至ったことが、今後の課題として残った。過去に展示物が置かれてこなかったようなスペースや、行われてこなかった設置方法にも目を向け、今後更に当館の展示活用方法を模索していきたいと思う。

大東市立歴史民俗資料館 職員

名誉館長 笠井敏光（考古）

館長・エデュケーター 武井二葉（美術・博物館教育）

主任学芸員 大畠博嗣（文献）

学芸員 河島明子（美術・博物館教育）2016.9.1～

学芸員 甲斐規予子（民具）企画展、2016.9.1～

スタッフ 森井綾乃（展示デザイン）

学芸員 溝辺悠介（民具）～2016.7.31

スタッフ 中嶋いぶき（民具・展示デザイン）～2017.3.31

スタッフ 三榎友梨香（民具） 企画展、2017春季展

（平成29年3月31日現在）

大東市立歴史民俗資料館 館報 第1号

平成29年（2017）6月1日 発行

編集・発行 大東市立歴史民俗資料館

（指定管理者 株式会社 アステム）

〒574-0015

大阪府大東市野崎3-6-1

大東市立歴史とスポーツふれあいセンター内

印刷 株式会社 アステム

- 16 野口博久「『長谷寺驗記』—勧進僧の手による靈驗記—」(『国文学 解釈と鑑賞』五十八巻十二号、至文堂、一九九三)
- 17 永井義憲「長谷信仰」(『靈地』岩波講座 日本文学と仏教 第七巻、岩波書店、一九九五)
- 18 鴻池義一「研究ノート 大坂の開帳」(『大阪の歴史』第二十二号、大阪市史編纂所、一九八七)
- 19 『江口』を題材にした絵画やその変遷過程については、石田佳也「見立江口図」試論—謡曲の絵画化をめぐって—(『サントリーアート論集』五号、サントリーアート館、一九九四)に詳しい。
- 20 前掲註 5 展示解説 13
- 21 『摂陽奇観』巻之二十五ノ上(『浪速叢書』第三、浪速叢書刊行会、一九二七)
- 22 「解説」(『新編日本古典文学全集』七十四、小学館、一九九七)
- 23 前掲註 1
- 24 前掲註 5
- 25 前掲註 5 展示解説 14
- 26 「神社仏閣開帳願ニ付達」(梅田義彦『増補改訂 日本宗教制度史』近世編付編、東宣出版、一九七一)
- 27 前掲註 18
- 28 前掲註 18
- 29 『野崎觀音—いまむかし—』展図録(大東市立歴史民俗資料館、二〇一四)
- 30 前掲註 1、5

中も「ふり売り喧嘩」や茶屋など娯楽性の高いものが多く、人々に浸透していくのではないだろうか。

しかし、江戸期には本尊開帳と野崎まいり（無縁経法要）が同義だったかどうか疑問である。現在では、野崎まいり期間中には本尊開帳が行われ、最終日に法要が執り行われていると先述したが、江戸期の無縁経法要に関する記録が残されておらず、どのぐらいの頻度で法要が行われていたのか不明である。今後の調査等で明らかにすべき課題の一つである。

次に資料館や寺近隣に居住する方や古老から、野崎周辺には檀家がなく、門真市島頭に檀家が多いので、江戸期に寺は島頭から現在地へ移転したのではという話を聞くことがある。これに関して、元禄五年（一六九二）に作成された寺の敷地に関する記録の中に庫裏と方丈の面積が書かれているので、少なくとも元禄五年には当地に存在していたことがわかる。しかし、先に挙げた梵鐘銘によると、永仁二年（一二九四）の入蓮という僧による伽藍の復興、戦国期の戦火による焼失以降、青巖の入寺まで歴史に空白がある。その部分を埋める史料が今まで発見されていないので、史料の発見が今後の課題であろう。

1 『大東市史』（大東市教育委員会編、一九七三）

2 新矢昌昭「[のざきまいり]に見る庶民参詣の娯楽性」（『佛大社会学』三十一号、佛教大学社会学編集委員、二〇〇七）

3 『野崎まいりとお染・久松』展図録（大東市立歴史民俗資料館、二〇〇九）

4 谷口廣之「野崎参りの風景—近世大坂の近郊社寺参詣の一事例—」（『阪南論集』人文・自然科学編 四十七巻、阪南大学学会、二〇一一）

5 前掲註 3 史料解説 11

6 当館蔵

7 前掲註 5 文中の句点は筆者が適宜挿入した。

8 前掲註 6

9 『大阪府の地名』（オンドマンド版）（日本歴史地名大系28、平凡社、二〇〇一）

10 『摂津名所図会』上巻（大日本名所図会刊行会、一九一九初版、臨川書店、一九七四復刊）

11 『摂陽奇観』巻之二（『浪速叢書』第一、浪花叢書刊行会、一九二六）文中の句点は筆者が適宜挿入した。

12 『大阪府全志』巻之三（清文堂出版、一九二二初版、一九七五復刊）

13 『東淀川区史』（東淀川区史編集委員会、一九五六）

14 『長谷寺靈験記』（『続群書類従』第二十七輯下 積家部、続群書類従完成会、一九二三初版、一九七八訂正三版）

15 永井義憲「長谷寺の勧進聖」（『豊山教学大会紀要』第二十二号、豊山教学振興会、一九九四）

辰三月廿五日

額田 八郎右衛門（印）
野崎村 勘右衛門（印）

同村 庄五三郎（印）
(以下四十二名略)²⁵

とあり、野崎村を含めた近郊の住人四十五名の署名・捺印された文書がある。この文書は寺の法要に際し、煮売茶屋と呼ばれる煮豆や煮魚などの惣菜を提供する茶屋を出店するにあたって、慈眼寺へ提出した誓約書である。火の用心・博打の宿にしない・身元不明な人間には宿泊させない・喧嘩・魚類の販売禁止・遊女を店員として雇わないなどの項目を遵守する旨が書かれている。こういった文書から、江戸期には、少なくとも四十五件の茶屋が出店していたことがわかり、現在にも劣らず、野崎まいりの期間中には門前が賑つていたことが窺える。

右に述べたように、江戸期より参詣する人々で賑つていた野崎まいりであるが、どのくらいの頻度で、またどのぐらいの回数が行われていたのであるか。幕府法令を見ると、享保四年（一七一九）に本尊開帳について制限を加えており、「神社仏閣開帳之儀、三拾三年過候而願出候分は、御取上に可有之候。右年数不相満願出候分は、御取上無之筈に候。」²⁶と、三十三年を過ぎた本尊開帳の申請は開催許可を出すが、それを満たない年数で申請をした場合は、不許可にする旨が書かれている。

こうした法律がある中で、慈眼寺は江戸期に何回野崎まいりを行っていたのであるうか。先に挙げた鴻池氏の研究によれば、享保六年の初開帳から宝暦十一年（一七六一）、文政八年（一八一五）、嘉永二年（一八四九）の四回行われている。²⁷一回目と二回目は三十年間、二回目と三回目の間隔は六十年以上開いているが、三回目と四回目が二十四年と法令に定められた年数よりも短い期間で行われることがわかる。

おわりに

これまで慈眼寺と野崎まいりの歴史について史料を提示しながら述べてきたが、本稿のまとめと今後の課題を記しておく。

慈眼寺が建立された確かな時期は不明であるが、寺の歴史を記した記録類を見ると、長谷寺や江口之君との関係を示す記述が見受けられる。しかしながら、長谷寺や江口之君に関連する史料を見ると、慈眼寺との関係性を示す記述が見られない。さらに、当時は長谷寺の縁起や江口之君の説話は、寺の出開帳や能、謡曲、それにまつわる絵画により一般の人々に受け入れられており、『図会』などに掲載されることにより、参詣者の興味を持たせる作用を狙つていたのではないだろうか。

また、野崎まいりは寺に現存する史料から、少なくとも享保六年より本尊開帳が行なわれており、江戸期には合計四回行われていることが記録から判明する。さらに、法要期間中には茶屋が四十五件出店しており、門前も現在と変わらないほどに賑わいを見せていた。さらに、法要期間中には茶屋が四十五件出店しており、門前も現在と変わらないほどに賑わいを見せていた。

現存する史料から、多くのことが判明したが、慈眼寺が本尊開帳を行つた理由は、どういったことが考えられるだろうか。この答えとして、鴻池氏が、開帳がかくも隆盛をきわめた理由としては、当時の一般民衆の宗教的な要求と娯楽を求める心とを、開帳が同時に満たし得たという点にあるのではない。特に娯楽施設が十分整つていなかつた頃にあつては、開帳によせる民衆の期待は非常に大きかつたといえる。²⁸

と指摘するように、大和川の付替えによる深野池・新開池の新田開発と、井路の整備により、船による大坂市中からのアクセスの便利さと、日帰りで出かけられる距離という立地、さらに無縁經法要への参加と、普段開帳をしていかつた秘仏本尊を三十年に一度参詣できるという信仰心を満たすのに適した場所が慈眼寺だつたのではないだろうか。つまり、現在ほど娯楽のなかつた江戸期に、伊勢まいりや西国三十三ヶ所巡礼に比べて、大坂市中から近場で寺社参詣が可能で、道

長²¹と書かれており、大坂市中の人々にとつても注目をされていたことが窺える。

さるに、近松門左衛門作の人形淨瑠璃『女殺油地獄』「徳庵堤の段」に、主人公が馴染みの女郎を追いかけて野崎まいりに出かけるところが描かれている。この作品の初演は享保六年七月で²²、本尊開帳が終了した三ヵ月後には、早くも淨瑠璃として上演されており、近松が作品に取り入れるほど注目されていたことがわかる。

(二) 江戸期における野崎まいりの様子

これまで述べてきたように、野崎まいりは少なくとも享保六年三月から始められていたことが判明したが、当時どういった様子で人々は参詣をしていたのであろうか。現存する史料より少し探つてみたい。

まず、道中については、『大東市史²³』や当館特別展『野崎まいりとお染・久松²⁴』

図録などでも触れているように、船と陸路による参詣が行われており、船は八軒屋浜より寝屋川をさかのぼり、住道浜で下船すると田船に乗換えて觀音浜まで行き、徒步で専応寺太子堂へ参詣してから、慈眼寺へと向かう。これに対して、陸路で参詣する人々は、寝屋川の堤防を徒步でまずは専応寺太子堂を目指し、慈眼寺へと向かう。その際に船の乗客と徒步の人がお互いを罵り合うのが「ふり売り喧嘩」と言われており、落語「野崎詣り」の中でその情景が語られている。また、『河内名所図会』にも野崎参りの様子が挿絵にて描かれており、当時の様子を窺うことが出来る。

先に述べたように、現在では野崎駅前から寺まで参道商店街の両側に露店が出店して大いに賑っているが、江戸期の寺近辺の様子はどういった様子だったのだろうか。寺には、「茶屋開設二付キ一札」と名付けられた古文書が残されている。

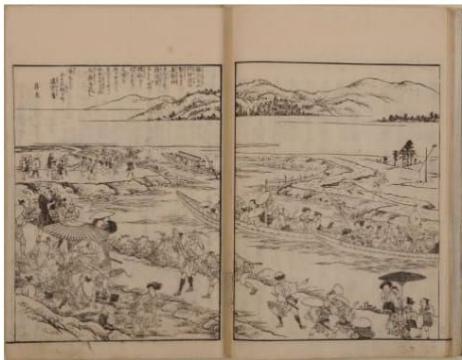


図1 野崎まいりの様子（『河内名所図会』、当館蔵）

一札之事

一御當地觀音様御法事二付

私共にうり茶屋仕候就夫御法度之趣被仰渡委細承知仕申候其趣一書を以手形仕候条々

一火之用心念を入可申候事

一はくゑきの宿仕間敷候事

一うさん成者ニ一夜之宿仕間敷候事

一けんくわ口論仕間敷候自然御座候節者私共早速出合しつめ可申候事

一魚類商売仕間敷候事
一遊女之儀堅置申間敷候自然

一越度ニ可被仰付候其時一言之御
一隠シ置外方相知し候はゝいか様とも

一うらみ申間敷候私共互ニ吟味仕

一若指置候者御座候はゝ早々可申上候事

右之通堅相守可申候為後日手形

仍如件

享保二十一年丙辰三月廿五日

一私共茶屋ニ使女指置候所遊女にて無之かと段々急度御吟味可被成候毛頭左様之者ニ而者無御座候若外方遊女ニテ御座候と訴人御座候はゝいか様とも越度ニ罷成り可申候其時一言之御うらみ申間敷候以上

ら考察を行つてきたが、次に慈眼寺で最も重要な行事である野崎まいりについて、
章を改めて考えてみたい。

二、野崎まいりについて

(一) 野崎まいりの開始時期

野崎まいりは、現在では大東市における春の風物詩として認知されており、毎年五月一日から八日までの間、市内外より多くの人々が訪れる。野崎まいり期間中は、最寄りの野崎駅より慈眼寺までの参道商店街の両側に露店が出店する。また、境内でもステージが組まれ、大道芸・落語・舞踊などが行われ、大いに賑わっている。本堂では、普段秘仏である本尊の十一面觀音が開帳されており、最終的には有縁・無縁関係なくすべてのものに感謝をする「無縁經法要」が執り行われる。この野崎まいりは、江戸期より有名だったようで、落語『野崎詣り』、人形淨瑠璃や歌舞伎の『女殺油地獄』・『新版歌祭文』に野崎まいりの情景が取り入れられ、さらに昭和初期には東海林太郎による『野崎小唄』が大流行し、現在でも歌い継がれている。このように野崎まいりの期間中に多くの参詣客で賑わい、落語・人形淨瑠璃や歌舞伎・歌謡曲といった芸能にも題材に扱われているが、實際にはいつごろから野崎まいりが行われていたのであろうか。

寺のパンフレットなどには、野崎まいりの始まりについて、「元禄時代より」始められたと書かれているが、寺に現存する古文書や記録からはつきりとした年代がわかるものは発見されていない。しかし、一点の古文書からある程度の時代を特定することができる。寺には「觀音堂入仏供養奉願口上書」と名称がついた古文書が残されており、左に全文を挙げると、

奉願口上書

□河州讃良郡本多唐之助殿知行所野崎村
慈眼寺禪宗曹洞派城州綴喜郡井手村

地蔵院末寺ニ而御座候事

一境内除地開基年曆委細貞享二年乙丑年

八月弥陀堂再興之願書具二指上候故此度
委細書付指上不申候事

一觀音堂及破損ニ候故修覆仕度旨去ル亥年

十一月御願申上候此度普請成就仕候依之入佛
堂供養之為メ來丑ノ三月十八日迄四月十八日

其節本尊觀音戸帳をも開置參詣之「
迄法事修行仕〇度奉存候〇面々ニも為致拝申度奉存」

拝致させ

右願之通被為 仰付被下候ハヽ難有可奉存候

以上

享保五年子十二月

慈眼寺

祥堂(印)

野崎村庄屋

甚兵衛(印)

同村年寄

徳兵衛(印)

同

仁兵衛(印)²⁰

とある。この古文書で注目すべき点は、一つ書きの三つ目に書かれている文言で、觀音堂（本堂）が破損したので修復を行うため、享保四年（一七一九）十一月に願いを出し、翌五年十二月に完成した。工事の際に堂外で安置していた仏像を観音堂へ戻し、享保六年三月十八日から四月十八日まで入仏供養を行い、その際に本来秘仏であった本尊を法要期間中に開帳したい旨が書かれている。管見の限りでは、この史料より以前の年紀が書かれたものが、寺所蔵の史料に存在せず、少なくとも享保六年から野崎まいりの原型となる本尊開帳が行われていたことが判明する。

また、この開帳について大坂市中に居住していた作家、浜松歌国が摂津・河内・和泉での出来事を記録した『摂陽奇觀』享保六年の項に、「三月より野崎村觀音開

寂光寺と号す、又みづから形を法体に刻み、五障の女身といへ共菩提心を

参詣譚が盛り込まれているのであるうか。

発し、衆生を慈念したるためしを見せしめしらしめ、貴婦賤女乃至遊君白拍子のたぐいをもあまねく無上道に入らしむる結縁とし給へり、かくて元久二年三月十四日西嶺にかたふく月と共に普賢菩薩の相をあらはし、白象に乗て去給へり（後略）¹¹

と、寺の開基は光相比丘尼で、諱は「妙のまへ」という女性で、生身の普賢菩薩だとしている。比丘尼は、西行との歌問答の後、発心して宝林山寂光寺を建立し、寺は様々な身分の女性から信仰を得ていた。比丘尼は、元久二年（一二〇五）三月十四日に亡くなつており、その際、比丘尼が普賢菩薩の姿となり、白象に乗つて去つたと書かれている。この略縁起を見る限り、慈眼寺と江口之君の関係を示す記載は見受けられない。また、『攝津名所図会』や、大正期に作成され、大阪府全域の地誌が書かれた『大阪府全志』¹²や、東淀川区の歴史をまとめた『東淀川区史』¹³等を見ても、関係性が浮き彫りになるような記載は見出せない。

それでは、長谷寺側の史料には慈眼寺や江口之君に関する記述が見られるだろうか。成立年代については、はつきりと判明していないが、鎌倉期頃の成立とされている『長谷寺驗記』（もしくは『長谷寺靈驗記』ともいう。以下『驗記』と略す）という史料が残されている。序文に「上巻ニハ十九説法ニ象テ当寺ノ旧記ヲ拾ヒ、下巻ニハ三十三身ヲ表シテ諸家ノ記録ヲ撰ス」¹⁴とあるように、『驗記』は、上巻に『法華經』觀世音菩薩普門品にある觀音菩薩が十九の場面において法を説く「十九説法」にちなんで十九話、下巻には觀音菩薩が三十三の姿になつて法を説く「三十三身」にちなんで三十三話の説話を収録している。また、上巻は長谷寺に残された記録を、下巻は外部の記録を拾遺して、長谷寺の十一面觀音の靈験についてまとめたものである。この『驗記』を見てみても、一条天皇の時期に江口の遊女、もしくは遊女が長谷寺に参詣したことが収録されておらず、さらに慈眼寺との関わりを示す記載も残されていない。

それでは、寂光寺・長谷寺の史料には慈眼寺と江口之君に関する記述がないのもかわらず、慈眼寺の梵鐘銘や『図会』には江口之君が長谷寺と慈眼寺への

が平安末期ごろからおり¹⁵、長谷寺の焼失時には勧進活動を行い、堂宇の再建に尽力していた。その中でも本願院に属する勧進聖によつて一度完成した『驗記』に新しい説話を加え、唱導資料として利用されていたようである。¹⁶さらには、江戸期に『長谷寺觀音驗記』として承応年間に刊行され、多くの人々に長谷寺の本尊には靈驗があることを知られていたのである。これに加えて、江戸期に入ると全国的に寺社で開帳が行われるようになり、江戸・京都・大坂など大都市に出張して法寶物類を開帳する出開帳が増加するようになる。長谷寺もその例に漏れず、鴻池義一氏の研究によると、明和三年（一七六六）、天保十一年（一八四〇）、明治六年（一八八三）の三度、堺と大坂で開帳が行われている。¹⁸こういった場所でも法寶物の解説だけでなく、本尊の靈驗譚が語られているはずで、世間に広く知れ渡つていたと考えられる。

次に江口之君について見ていくと、西行との歌問答に関して、平安末期頃に成立したと考えられる西行の歌集『山家集』、鎌倉期に成立した『新古今和歌集』、『撰集抄』に収録されている。また、江口之君が普賢菩薩の姿となり、白象に乗つて去る説話は、鎌倉期に成立した説話集『古事談』、『十訓抄』、『撰集抄』などに収録されていた。そこに歌問答と普賢菩薩の説話が融合したのが、觀阿弥により室町期に成立した能「江口」である。その後江戸期になると、謡本が流行し、版本が流布されるようになる。そうすると、円山応挙を始めとする画家たちが、謡本来題材とした絵画が描かれるようになり、一般的に江口之君の説話が広まつていったのである。

このように、長谷寺觀音の靈驗譚や江口之君の説話を慈眼寺の縁起に盛り込んだのは、長谷寺觀音・江口之君といった江戸期以降に一般の人々にも流布した説話を取り入れ、『図会』などに掲載されることにより、より多くの参詣者に興味を持たせる作用を狙つたものと考えられる。

これまで、寺の創建時期や縁起について、寺の史料や外部の史料を提示しながら

面大悲像完然於破宇之下、即今堂上之尊像是也、長者於是至誠誓祈七晝夜、而病惱頓瘳不耐感喜、即竭力重闢宏基不建伽藍殿宇莊麗而、卓犖一邦也（後略）⁷

とあり、引用した文言の要約をすると、一条天皇の時代（九八六～一〇一）に、摂津国難波郷に有名な伎（芸者）があり、その名前を「江口長者」といった。長者は一時病気を患い、和州初瀬寺（長谷寺）に病気が治るように祈願しにいったところ、夢に一人の僧侶が現れ、「福聚山（慈眼寺）は、当山（長谷寺）と違いく、慈眼寺は施無畏大士（観世音菩薩）の靈場である。長者の家より近いので、赴いて悪いを取り除くように願いなさい」と告げたので、早速慈眼寺へ赴いた建物が荒廃しており、本尊の十一面觀音を壊れた建物の下から見つけて七昼夜祈願したところ、病気が治癒した。そのお礼として、伽藍を再興したと書かれている。また、『図会』にも江口君に関する記載が見え、

（前略）抑一條院ノ御宇に、摂州難波江の渡口に住してゆきゝの旅客を饗す美女あり、世にこれを江口君といふ、ある時沈痼に罹て医療の驗さらになし、常に聞るは、和州初瀬寺の觀世音靈應殊に勝れさせ給ふ、既にかの參籠して懇に祷り、一七日満願の時靈夢を感じず、端嚴たる高僧來りて曰、河州野崎福聚山は我山に異ならず、其所の大悲に懇求せば所願空しからず、妓女夢覚て歎喜し直に尋て此山に來り、本尊を敬礼七昼夜に満ねれば忽病惱治愈す、これより伝聞て四來の縉素遠村近郷こゝに群す（後略）⁸

とあり、女性の名前が梵鐘銘と『図会』と比較すれば、「江口長者」、「江口君」と表現の違いと堂宇の再建についての記載はないが、内容は両方とも遜色はなく、「江口君」が長谷寺に参詣した際、夢告により慈眼寺へ赴き、七昼夜祈願し病気が治癒したとしている。このように、慈眼寺側の史料には江口之君・長谷寺と関係を示す記述が見られるが、江口之君や長谷寺側の史料には、どういった記述がみられるのであろうか。まずは、江口之君側の史料について確認をしたい。

江口之君は、梵鐘銘や『図会』にあるように、摂津国西成郡江口村（現、大阪市東淀川区）にいた遊女であった。彼女が居住していた江口は、延暦四年（七八

五）に淀川と三国川（神崎川）が開削によりつながると、平安京と山陽・西海道に行く道と南海道へ向かう道とに分岐する交通の要所となつた。平安中期以降、熊野・高野山・住吉社・四天王寺への参詣と、莊園制による莊園領主と現地との物資の輸送が盛んになると、往来の途次に江口に宿泊する人が多くなつた。その人々を目当てに遊女が集住し、神崎（現、兵庫県尼崎市）、蟹島（現、淀川区加島）と並び、色里として繁栄した。平安中期ごろから寺院参詣の途次に貴族たちは遊女たちが遊興を行つていたが、当時の遊女は神樂といった歌舞音曲だけではなく、和歌や今様といったものに優れていた。

そういった状況の中、天王寺詣の帰りに江口へ寄つた西行が、当地の遊女妙と歌問答を行い、一晩の宿を得たという説話が残されている。この説話については、『摂津名所図会』で「江口の遊女の和歌故実は「新古今集」「江家次第」、江口尼の事は西行の「撰集抄」等より外に証とすべき旧記いまだ見えたらず」と疑問を呈しているが、史実か否かという議論は、他の研究に譲るとして、当地には西行との歌問答の後、遊女妙が發心して建立した寺がある。それが宝林山普賢院寂光寺である。作成年代が不明であるが、寺の略縁起が残されており、少し長いが引

用すると、
諸仏薩埵利生方便は水にやどれる月のことくにて、更に凡心をもて思議すべからず、當院光相比丘尼、諱は妙のまへ、此里に住給ひて往来の船に口の一ふしをこめ心を慰しむるに似たれど、眞は生身の普賢菩薩、苦海の衆生に出離の縁を結ばしめ給へり、西行法師天王寺に詣てし、かへるさに一夜のたびねを求むとて

世の中をいとふまでこそかたからめかり
とよみしに、妙のまへ返事
のやどりをおしむ君哉

世をいとふ人としきけばかりの宿に心と
むなどおもふばかりそ

詠じ給ひき、其後此所に地をしめつゝ普賢堂法華三昧堂など經營し、宝林山

はじめに

大東市において、慈眼寺（野崎觀音）は古くから「野崎まいり」の寺として有名で、野崎まいり期間中には、毎年東海林太郎の「野崎小唄」が流れる中、野崎駅前から寺へ続く参道商店街が人で埋め尽くされるほど、大東市内外より参詣者が訪れる。

このように毎年多くの参詣者で賑い、歌謡曲にもなっている野崎まいりや慈眼寺の歴史について、意外と研究が進んでいない。大東市の歴史が書かれた『大東市史』には、寺伝や『河内名所図会』などを引用しながら、寺の歴史や野崎まいり、「新版歌祭文」の内容について紹介がされている¹。その後、新矢昌昭氏が、「娛樂性」をキーワードに野崎まいりについて考察を行っている²。これらの研究は、寺が所蔵する史料を公開していない時期のものであつたが、二〇〇九年に当館で慈眼寺が所蔵する史料を借用し、特別展『野崎まいりとお染・久松』³が開催され、図録や史料解説に史料が掲載され、研究が進むかに思われた。しかしながら、特別展後に発表された論文は、管見の限り谷口廣之氏の論文⁴しか見受けられない。

そこで、筆者は平成二十五年度より野崎まいりの時期に合わせ、当館で開催されている慈眼寺関係の展示を担当してきた。本稿では、展示に携わり借用史料を調査した経験から、外部の史料も引用しつつ、慈眼寺の歴史や野崎まいりについて考察していく。

一、慈眼寺の歴史について

(一) 寺の創建時期

まずは、慈眼寺の創建時期から見ていく。創建時期に関する記述は、宝永五年（一七〇八）、五世大真の発願により鑄造された梵鐘の銘に寺伝が刻まれており、「河州讚良郡野崎邑福聚山觀世慈眼禪寺者不知權輿⁵」とあり、寺の創建時期は不

明であることが記されている。

次に、享和元年（一八〇一）に刊行された『河内名所図会』（以下『図会』と略す）には、「寺説云」としながら、

夫當山は、南天竺波羅奈國大悲の聖蹟を摸して古刹たる事年既に深し、今まで寺前の沢を入呼んで波羅奈沢といふ、惜哉、中古以来伝記喪びて只郷童の口碑を証とす、故に開闢の年代事実詳ならず、大悲尊像も何人の刻める歟、寺宇の権輿も分明ならず（後略）⁶

と、慈眼寺の所在する場所は、釈迦が初めて比丘に説法を行った波羅奈国に似ているとされており、その遺跡を模して創建された寺で、寺前の沢を「波羅奈沢」と名付けられていることが記されている。さらに、古い寺の歴史は失われており不明とされている。このように、両方の記載から、寺の創建に関する史料が残されていないことがわかり、また、実際の現存する史料にもそのような史料は、管見の限り発見されていない。

(二) 慈眼寺と長谷寺・江口之君との関係

次に、寺と江口之君の関係について少し考えてみたい。江口之君は、寺伝では寺の中興の祖として取り上げられ、現在では本堂の東に隣接する「江口之君堂」に、君の像が安置されている。さらに、君の命日とされる毎年四月十四日には、「江口之君大祭」が「江口之君堂」にて執り行われ、君の像を開帳し、子授けや病気平癒を祈願して多くの参詣者が来訪する。これに加えて、毎月十四日には「君の市」が境内で開催され、骨董や手作りの市が立ち、多くの参詣者で賑っている。

現代でもこのように信仰を集める江口之君は、寺伝ではどのように記されているのであるか。まず、先述の梵鐘銘から見ていくと、

(前略) 傳曰、人王六十六代一條院御宇、有名伎居攝州難波郷、世是曰江口

長者、一時疾病、萬医拱手、祈之和州初瀬寺之觀世音、其夜夢異僧告曰、河東之福聚山者、不異我山、彼地者、即南天竺波羅奈國之一峰而、施無畏大士垂跡之靈場也、近汝家到彼懇求得免苦患、長者夢覺疾奔臻、當山果而、十一

れる墓標もある。その墓標に「俗名植村」とある。慈眼寺が大和郡山藩と縁があつたことから、大和の植村氏とのつながりも考えられる。

その脇に詳細不明だが龜趺碑の下部と想定される亀形の石がある。（地図★）

1 このように当寺は石仏や供養塔の数に劣らない多彩な石造物が見られる禅寺である。

石造物調査グループ

安達昌代・上野繁・岡崎玲子・黒川喜和子・加茂伸子・北野武司・田里孝子・中下志津子・中村義之・林田恵子・堀仁美・松井健一・森井綾乃・水永八十生



2 安永六年紙屋和三郎銘常夜燈一対(地図61・62)

「常夜燈」

願主肥前國平戸住 紙屋和三郎

安永六年丁酉歳仲春下浣 「」



寺が所蔵する祠堂鏡についての記録にも油糧金十両と共に寄進されたことが記されている。「寛政四年平戸六町図氏名・職種等一覧」「嘉永元年平戸町家之図氏名一覧」で探したが、紙屋はあるが紙屋和三郎は見られない。(いずれも『平戸市史絵図編繪図に見る平戸』) 大坂の紙屋にも和三郎の名は見つけられない。

どの様な人物かは不明のままである。

3 嘉永二年芭蕉句碑(地図85)

「涅槃会や皺手手合わする数珠の音 翁」

嘉永二年晚秋建之 道三岡岳 「」



この句は、初め『続猿蓑集』(元禄六年)に収録されており、後に「灌仏や」と改作されている。芭蕉が当地を訪れた記録はなく、浅草觀音を詠んだものである。

嘉永二年の三月に秘仏本尊十一面觀音立像が開帳されたのに合わせこの句碑が建てられたとも考えられる。道三岡岳についてもわからない。

境内にはもう一つ芭蕉句碑がある。(地図32)「觀音の いらか見やり都花の久母 芭蕉翁」で、裏面に文字はあるが建てた年は読み取れない。前掲の絵図類にも描かれていないので、比較的新しいと考えられる。貞享三年(一六八七)の『未若葉』では結句が「花の雲」になっている。この句も浅草觀音を詠んだものであるが、野崎觀音の情景としてもよく似合う。

4 永仁二年石造九重層塔(地図36)

「敬白 志者為」に始まる銘文はかなり読めなくなっている。

永仁二年(一二九四)四月八日に主君ならびに両親の菩提のため「沙彌入蓮」と「秦氏□」が建てたもので、釈迦の降誕を祝う花祭(灌仏会)の日付に合わせている。



5 文化二年雪見灯籠一対(地図47・48)

『当國河内郡』 「當國河内郡

松原村住

松原村住

河内屋

阿波屋

斗崎八郎兵衛 「」

吉兵衛 「」



本堂正面石段上部にあり、台石の下半分が土中と磨滅で寄進者名の一部が読み取れなかつたが、メンバーの一人の粘り強い調査で、松原村に同時期(文化六年)の石造物(同村松原寺在手水鉢)に雪見灯籠と同じ寄進者名を見つけることができた。

松原村は当寺から少し南に位置し、大坂から奈良に向う街道「暗がり越え奈良街道」の大坂側最後の宿場であった。松原宿から北に向うと野崎觀音に行く旅籠屋の阿波屋・河内屋と野崎觀音への参詣客の結びつきが伺われる。

6 昭和二十九年悲母觀音(地図33)

建立者は戦後の復興期から高度成長にかけ政財界で活躍した人物で、電源開発総裁時の莊川桜の移植でも知られる。

母親が当寺近くの出で馴染みの地である。「余十六歳母を亡ふ爾來五十餘年・・・」で始まる建立由緒(紙幅の都合で割愛)は、高崎達之助という人物を読み解く資料になろう。

7 その他の石造物

他にも、野崎まいりに関係して、明治初めごろの「お染久松之塚」(地図86)や歌謡曲「野崎詣り」の作詞者・山中楓溪顯彰碑(地図57)がある。芸能の舞台に取り上げられことからか、戦後には歌碑や川柳碑などが建てられている。また、墓地には、「宝永六年(一七〇九)朴室了淳信士之墓」(地図★3)がある。朴室名は、古くは日本書紀孝徳元年九月の条に朴室古(えむろふる)が見える。秦氏と共に渡来系とされるので、大阪東部と渡来人のつながりが想起さ

野崎観音の石造物調査中間報告

私たち市民学芸員「石造物調査グループ」は、野崎観音境内にある石造物を二年に渡りリストアップしながら、文字が書かれているものを調査・記録してきた。そこで、今回一定の整理をし中間報告を行うことにした。

大阪府大東市の福聚山慈眼禪寺は野崎まいりの寺「野崎観音」と呼ばれ、人形淨瑠璃のお染久松の物語や落語「野崎詣り」の舞台として知られている。

場所も大阪東部の山裾に位置し、大阪平野が一望でき、行楽にもいい地である。更に、平安時代の物語にも登場する「江口の遊女」の一人が病を治したという靈験あらたかな観音菩薩の寺として年間を通して多くの参詣者が訪れる。また、境内には、色々な石造物が多く寄進され設置されている。

一 文字が書かれている石造物一覧

供養塔他	石段関係	記念碑	狛犬	鳥居	句・詩・川柳碑	手水鉢	灯籠	種類	備考		数
38	6	8	2	1	6	6	3	12			
		顕彰碑・記念碑 芳名碑				標石	寺院標石 神社標石	石仏	石仏・大師石像		

寄進者名や年号等何らかの文字が記されている石造物は八十六基ある。（墓標を除く。対になつている場合はそれぞれ数えた。）その内訳は下表となる。なお、境内にある「南条神社」の石造物も含めた。

この神社は江戸時代には牛頭天王社と呼ばれ野崎観音とは一体のものであった。

寺伝では、寺は、戦国時代の戦乱で荒廃し、江戸時代の初め曹洞宗の僧侶によつて再興したとされる。慈眼寺との関係は不明だが、背後の山腹に永仁二年（一一九四）銘の石造九重層塔がある。

それ以外は再興以後の元禄六年（一六九三）の手水鉢と元禄十年の鳥居、元禄

十二年（一六九九）の燈籠が古く、他は、再興後寺容が整つた千七百年代以降である。

一八〇一年発刊の「河内名所図会」の境内絵図と江戸期末から明治初めの頃の作と考えられる「野崎観音全図」を比べると、石造物と建物の位置かなり変

二 主な石造物に関する説明

現在残されている石造物の中から特徴ある幾つかを選んで紹介してみたい。

1 寛政九年橋川源吾右衛門銘常夜燈一対（地図10・13）

「 寛政九年丁巳歳睦月下旬

常夜燈

河州茨田郡横地村

橋川源吾右衛門正倫

橋川源吾右衛門は、「河州茨田郡横地村」（現門真市）の庄屋で、

領主永井氏に取り立てられ代官役を担つてゐる。

横地村が望まれる観音境内西門前に亡妻の供養として三回忌の年寄進されたと思われる。

境内の墓所には、亀甲文様の大きな台座石をもつ夫婦墓も立てられてゐる。（地図7・5）地元の門真市には、源右衛門を讃える昔話が伝えられている。



